

GE625

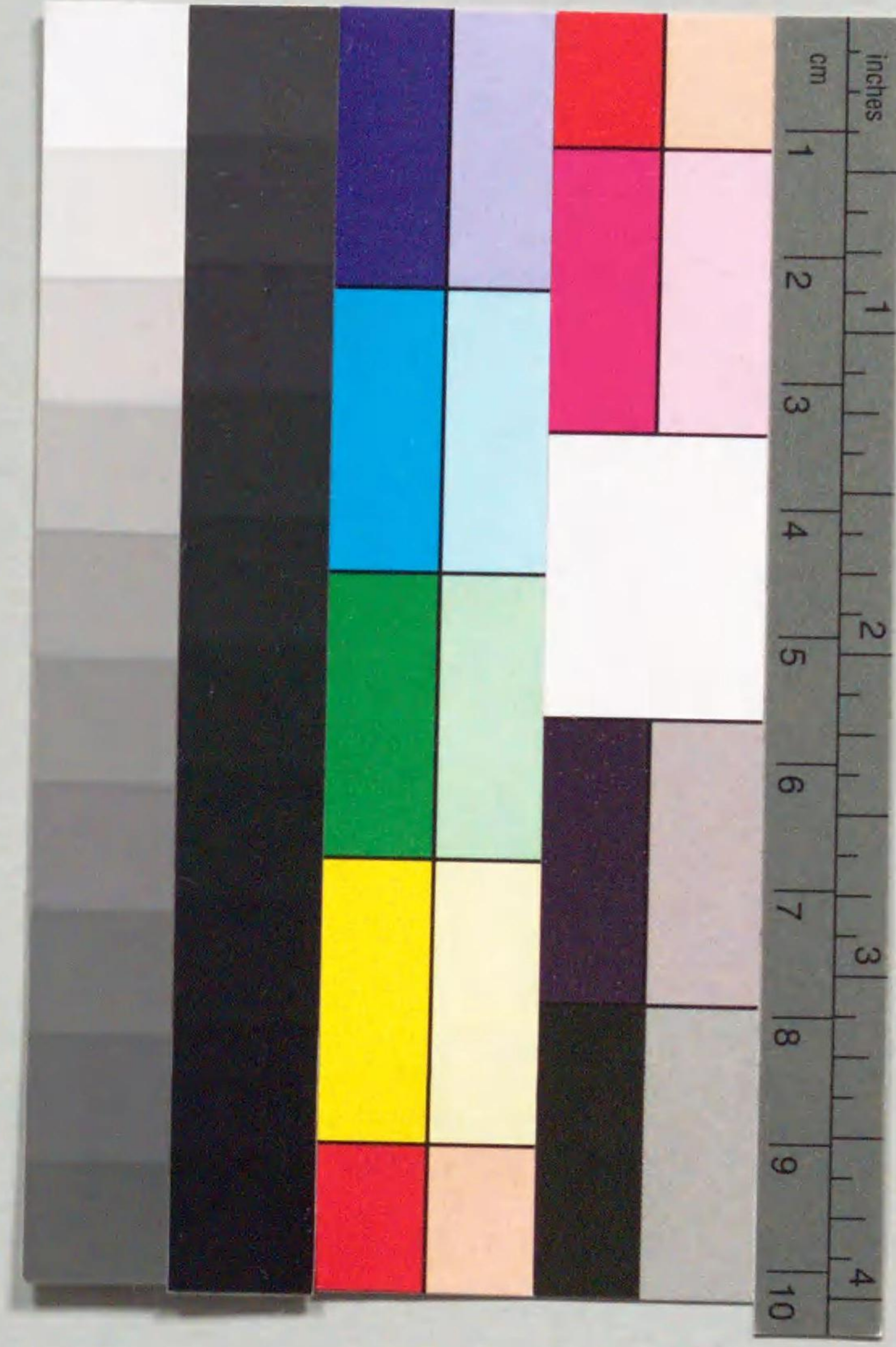
2

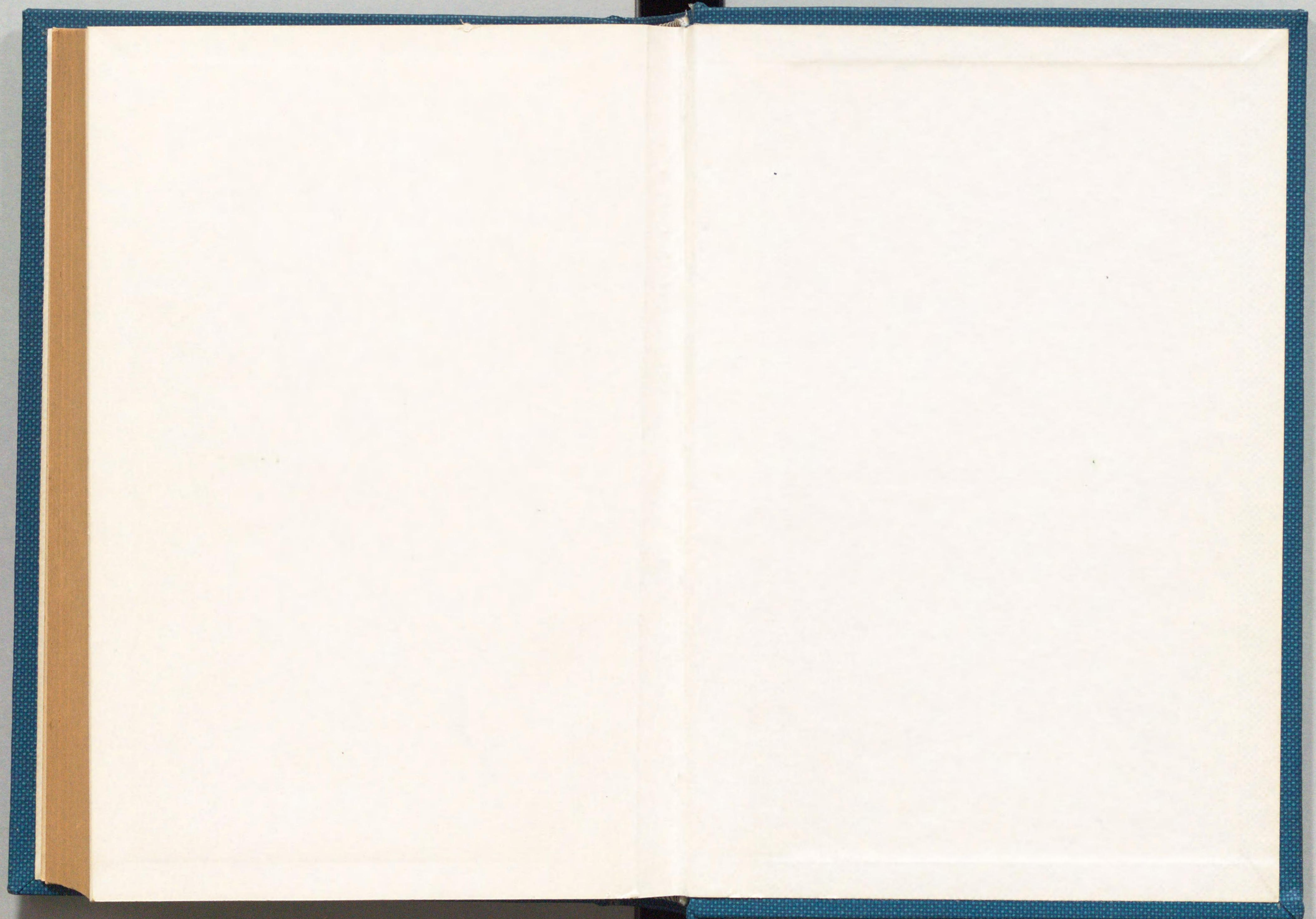


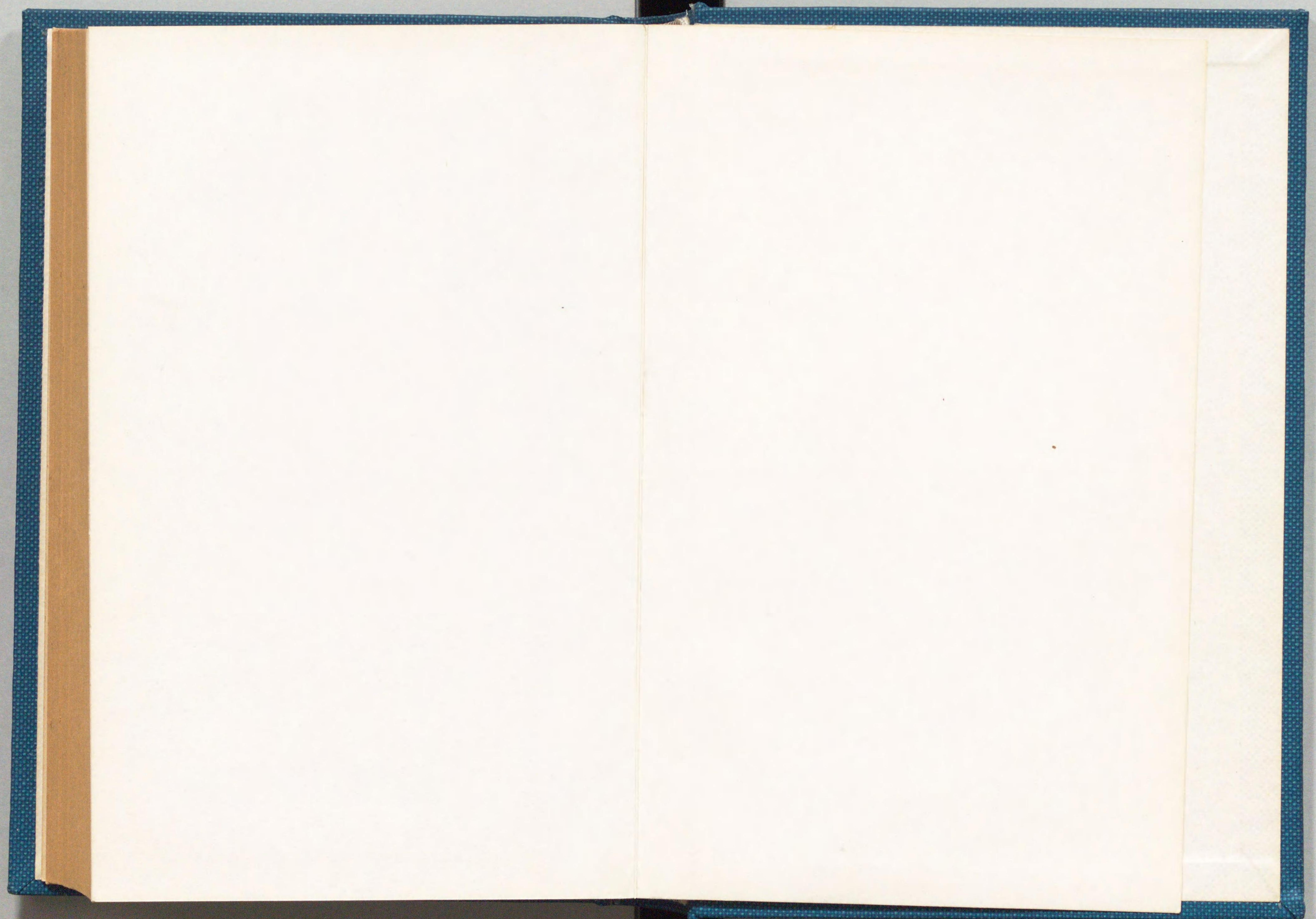
00758142



複写







三〇N17

叫ぶ 印度は

著スーボ・リハビ・スラ

院書教三

貴族
354
310

著スーボ・リハビ・スラ

犬の叫びは度由



三教書院刊

GE625

2



758142

自序

第一次世界戦争の始まつたのは一九一四年であるが、是より一世紀前、即ち一八一四年頃迄、亞細亞は歐羅巴と比較して何等劣つた處はなく、寧ろ或るものに就いては歐洲を凌駕してゐたのである。然るに其の後亞細亞は各方面に於いて衰微し始め、白人勢力東漸の勢を激化するに至つた。亞細亞は何故に衰微し始めたか、其の原因は多々あるが、最も主要なるものは、亞細亞が當時の時代の産物たる機械工業に於いて遅れてゐたことを挙げ得る。而して斯かる傾向は日露戦争迄繼續されたのであるが、日露戦争は始めて一方に於いて亞細亞凋落の勢を挽回すると共に、他方白人勢力の東漸を阻止し得たのであつた。

抑々日露戦争は單に日本と露西亞との間だけの戦ではなかつた。それは同時に亞細亞と歐洲との戦であり、また東洋精神を代表する日本と西歐唯物主義を代表する露西亞との戦であつたといふ事が出来る。而して、東洋精神は西洋唯物主義に打勝つたのである。更に換言すれば、日露戦役は徳と不徳、善と惡との戦であり、善及び徳は惡及び不徳に打勝つたのである。

眠れる亞細亞は日露戦争に依つて始めて覺醒した。西は土耳其より東は支那に至る迄の亞細亞各國に改造運動、覺醒運動、革新運動が相踵いで勃興した。日露戦役は將に復興亞細亞の礎石であつたのである。

同様に今度の支那事變も單に日本と支那との戦と見るべきではない。即ち一方に於いて亞細亞を代表する日本と、他方支那の背後に暗躍する英米勢力との間の闘である。而して日露戦争は亞細亞復興の礎石を築いたが、支那事變は是を實現完成す

る使命を持つものである。支那事變の成果を收むることに依つて、亞細亞は完全に再建せられ、亞細亞から英米勢力を驅逐し、新亞細亞が誕生するのである。

過去一世紀の歴史を見るに、西力東漸を代表するものは英帝國であり、爾余の西歐諸國は單に英國の例に倣つたに過ぎないといへる。而して今日亞細亞に於ける英米勢力の代表たる英國を粉碎すれば、亞細亞に於ける爾余の英米勢力も自動的に瓦解することは明白である。此の秋にあたり、亞細亞に於ける英帝國主義の據點であり寶庫である印度を印度人の手に恢復せしむる程緊要なるはない。印度が獨立すれば亞細亞は始めて亞細亞人の有に歸するのである。故に亞細亞復興を志す士は、印度が英國の桎梏より一日も早く解放せられる様盡力を惜まざらんことを希望して已まぬのである。

私が印度革命運動に身を投じたのは少年時代であるが、其の後、一九〇八年より

一九一五年に亘り、印度獨立の爲に凡ゆる手段を講じ、就中一九一五年には印度兵と聯絡して北部印度に於いて大規模の革命を企畫したのであるが、遂に失敗に歸したのである。而して其の間印度に於ける英國政府當局は、一九一三年より一九一五年に亘り、私を逮捕する爲に凡ゆる方法を講じ、各地に密偵刑事を派し、到る處へ私の寫眞を配布し、また私の逮捕に一萬二千留比^{ルビ}の賞金を懸けるに至つたのであるが、革命運動は却つて全國的に擴張するに至つたのである。即ち十數名の警視、高等文官等の暗殺または負傷をみ、當時の印度總督ハーデング卿も革命黨の爆彈で重傷を受け、一時は生命を危ぶまれたのである。然し一九一五年の革命は失敗に歸し、その結果、多數の同志が銃殺または絞殺に處せられた爲、私は國外よりの援助を受け以て獨立の目的を達すべく、亞細亞に於いて獨り隆々たる國運を示せる日本に參つたのである。即ち、當時偶々タゴール氏が訪日せんとしつゝあつたのを利用し、

同氏の親戚P・N・タゴールと名乗り、カルカッタより日本郵船讚岐丸の乗客となつたのであるが、船長、事務長等誰一人疑ふものなく、幸に無事に神戸に上陸し、艦にて上京した。次いで上海に向け出發したが、其の目的は當時歐洲戰亂の最中であり、獨逸政府をして印度革命を援助せしめ、武器彈藥を送らしむるにあつたが、是また失敗に歸し、已むなく私は日本に戻つて來たのである。而して當時日本には偶々孫逸仙氏が來朝中であり、孫氏と會見の際、氏は頻りに私の日本に滞在することを勧め、茲に始めて私は日本に滞在する決意をしたのである。

是より先、私がP・N・タゴールの變名を用ひ來つたことに對し、英國政府は聊かの疑問も持たなかつたのであるが、私が上海より再び渡日せる頃、始めて實はボースであることを探知し、東京の英國大使館より日本政府に私の身柄引渡を要求し來つた爲、當時の日本政府は已むなく、私に五日以内に國外に退去することを命令し

たのである。然し頭山滿先生始め日本國民一般は私を支持し、結局頭山先生は私を
隠匿する決意をせられ、爾後約八年私は世間より隠れて來たのであるが、一九二三
年即ち大正十二年日本に歸化し、爾後聊か生地印度及び亞細亞復興の爲に努めてゐ
るのである。即ち爾來長崎に汎亞細亞會議を開き、或は新聞を發行し、また著書と
して革命亞細亞の展望、印度頓智物語、革命の印度、桎梏の印度、印度民話集、青
年亞細亞の勝利を刊行し來り、本書は私にとつて第七番目の著書である。

更に昨年、支那事變の勃發と共に青年亞細亞聯盟を組織し、且つ全國數十ヶ所に
亘り亞細亞解放戰としての支那事變に就き講演旅行を行ひ、特に亞細亞解放の爲、
日獨伊三國攻守同盟の緊要なるを力説せる處、ムッソリーニ氏は昨年十一月二日付
ポポロ・デイタリア紙に於いて青年亞細亞會議の決議を支持し、吾人の反共反英的
態度に賛意を表する處があつた。

言ふ迄もなく、今日は亞細亞解放實現のため、千載一遇の好機である。亞細亞人
は此の際擧つて亞細亞解放の爲献身すべきであるが、斯かる時に於いて、亞細亞問
題の中核をなす印度問題に就き本書を上梓し得る機を得たるを欣快とするものであ
る。

昭和十三年紀元節

東京市澁谷區穩田三ノ七九

ラス・ビハリ・ボース

改版の序

大東亞戦争の勃發と日本陸海軍の赫々たる戦果に依り、今や新しき歴史が大東亞につくられつゝある。而して、新しき亞細亞を築く爲には英帝國主義の牙城たる印度を其の鐵鎖より解放せねばならぬ。

英帝國勢力の根幹はマレーに非ずビルマに非ず、實に印度にあり、印度四億の民の解放と獨立こそは八紘一字の大精神を全東亞の被壓迫民族に明かにするものである。今や我々は此の印度獨立を完成する爲に同志と共に邁進する。言葉の時ではなく實行の時が來てゐる。

我々は先覺及び同志と共に、ビルマに在住の約百萬、マレーの約六十萬、タイの

約五萬、佛印の數千、香港・上海・漢口の三千、北支の百、日本の二百の在留印度人を組織し、是等が打つて一九となり、印度四億の同胞に反英獨立を力強く呼びかけんとするものである。

茲に改版刊行の序を叙ぶるに當り、所懐の一端を披瀝し大方の御援助を乞はんとするものである。

尙本改版に當つては、前著「インドの叫び」に若干訂正を加へると共に、第二次歐洲大戦及び大東亞戦争に關聯する新章を附加することゝした。

昭和十七年三月

ラス・ビハリー・ボース

印度は叫ぶ 目次

第一章 骨と皮のみ……………一頁

第二章 英國治下の印度大衆……………九

第三章 この搾取を見よ……………一六

第四章 英帝國の「分割支配」政策……………二六

第五章 英國の偽瞞政策……………三三

第六章 赤裸々の英帝國……………四一

第七章 英國の印度侵略史……………四七

第八章 印度國民運動史……………五五

第九章 英帝國主義と印度産業……………一〇〇

第十章 印度及び印度文明の價值……………一四一

第十一章 第一次印度革命の壓服……………一四九

第十二章 アムリツサル事件當時の大彈壓……………一五七

第十三章 亡びゆく英帝國……………一九四

第十四章 印度は叫ぶ……………二〇三

第十五章 印度と共產主義……………二〇九

第十六章 印度婦人と國民運動……………二二六

第十七章 英帝國打倒論……………二三五

第十八章 英國の壓政と印度……………二四三

第十九章 第二次歐洲戦争と印度……………二五八

第二十章 大東亞戦争と印度獨立……………二六三

第一章 骨と皮のみ

「印度人は生きてゐるのでなく、唯居るといふだけだ。」

一英人著者

「豊饒なる土地に各種の産物をつくることが出来ながら、貧苦に悩む國ありとせば、其國の政治に根本的な誤りがあるからだ」

ジョン・ブライト

「印度の進歩を阻むものは國民の胃の腑が空であることだ」 ハロルド・エツチ・マン

「印度人の二億五千萬以上は生れてから死ぬ迄ひもじい思ひをしてゐる。」

ロンドン・デリー・ヘラルド

嘗て世界最富の國であつた印度で人々は今日骨と皮のみの生活を送つてゐる。英國統治下の印度は胃の腑の空な泥小屋の中に住む一文無しの大衆の國である。而して榮養不良は萬病の因であ

るから、英國統治以來印度には疫病、コレラ、インフルエンザが未だ曾つて無き流行記録を示すに至つた。自然死亡率は高くなり、就中幼児死亡率の如き千に就き一八七である。

現在に於ける印度人の栄養不良は驚くべき程であり、ツチに依れば三人に一人が餓えてゐる。即ちすべての人が三度の中一度は食事を攝つてゐない割である。印度人が肉體的精神的に進歩しないのは斯かる原因に基くものである。然かも英國は印度が満足し、繁榮し、英國のお蔭で治安が保たれ、衛生設備、饑饉対策等が行はれてゐると誇る。而してかゝる餓ゑたる國から英國が巨額の富を得んとしつゝあることは大きな運命の皮肉である。英國が所謂英國の平和 Pax Britannica に依り印度人を饑餓線上に追ひ立てながら重税を課し、印度のあらゆる生活力を吸収してゐる事實を認めようとするのは、勿論容易に理解出来ることである。英國の平和が如何なるものであるかは次に掲げた諸々の證言の示すところである。

一、故サンダーランド博士はその著に於いて次のやうに述べてゐる。

「事實印度に於いて饑饉は永續のものである。雨量多く作物の豊作の時でも何處かに必ず饑饉

がある。そして流行病でも起らうものなら忽ち多數の死亡者を生ずるものである。」

二、チャールス・エリオット卿曰く、「人口の半分は一年の中六ヶ月に亘り満足な食事といふものを知らなす。」

三、ゴカールレ氏曰く、「六千萬乃至七千萬の印度人は一年中ひもじい思ひを忘れたことがなす。」

四、モンターギユ・チエルムスフォード報告案には「印度大衆は無智、貧乏で、歐洲農民のはるか水準下に在る。」と記されてゐる。

五、印度憲法に關する兩院協議會報告に曰く「印度人の一般生活程度は低く、歐洲の後進國の水準以下にある。農村に於いて讀み書きのできる者は極めて稀である。」

六、英國の統治二世紀間に於ける印度人一人の平均収入は一日四仙である。

七、一九三二年サイモン報告は、印度の經濟狀況に就き次のやうに述べてゐる。

「印度の窮乏は容易に想像することは出来ない。一九二二年カーゾン卿が豫算演説に於いて、英領

印度一人當り平均収入を年三十留比として以來、平均収入に關する公式の測定は未だ無いが、大戰後數名の經濟學者は之が測定を試みてゐる。その一人に依れば、英領印度一人當り収入一九二〇——二二年百七留比、一九二一——二二年百十六留比としてゐるが、第二の學者に依れば、全印度に就き七十四留比とし、第三の學者はマドラス州に就いてのみ（一九一九——二〇）百二留比としてゐる。之等の測定は何れも基礎材料が不完全であるから満足したものとは云へないが、その中最も樂觀的なものをとつて見ても、一九二二年の一人當り収入、英貨八磅となる（同年英國に於ける一人當り収入九十五磅）。

即ちサイモン報告に依れば、一九三一年に於ける印度の平均収入は英國のその十二分の一となるのである。然かもその後物價は次第に低下してゐるから、現在の一人當り収入は更に少なくなつてゐるわけである。猶注意すべきは前記報告に引用された數字は金持の富は含まれてゐるが、貧農の収入は殆んど測定し難かつたことである。

八、最近印度政府は金融委員會を任命し、印度人の經濟狀態を調査したが、一九三一年發表の

報告に依れば次の如くである。

「農民の収入は非常に少い。農産額は一九二八年の價格標準で年一、二〇〇クローア留比となるが此他副業収入約二割ありとし、且つ過去十年間の人口増加及び一九二八年以來の物價下落を考慮外に置き計算するも農民一人當りの収入は年四十二留比即ち三磅である。即ち農民の窮乏は議論の餘地のないものである。」

右の計算に依れば一日一人當りの収入は二アンナ以下となるが、斯かる少額で果して生活が出来るであらうか。それだけの麥粉だけでも到底饑餓を免れないであらう。

九、「印度農村經濟研究」に於てケサバ・イエンガルは次のやうに述べてゐる。

「農民は食欲を如何にして満足させるかよりも如何にして是を抑へるかに苦心してゐる様だ。食ふ物の榮養價の如き勿論問題でない。大抵のものが米の酒を飲むがそれは食ふ物を減らさんが爲に外ならぬ。」

十、ボンベイ州農業局長ハロルド・マン氏は言ふ。「印度農民の繁榮は其胃の腑を充してやるこ

とにある。……余が印度を去るにあたり印度人、爲政者、社會事業家におけるメツセージは、農民に充分な食物を與へられたいといふことである。」

十一、アーノルド・ラブトン は印度農民の狀態に就いて次のやうに述べてゐる。

「農民の家は泥でつくられた草ぶきのもので窓も扉もない。外には火を起すところと料理場がある。彼等は腰に布をつけてゐるだけだ。飲酒、喫煙もしなければ、新聞も讀まない。娛樂としては何もない。彼等の信ずる宗教は忍従、満足を教へるので、饑餓に面しつゝ是に甘んじてゐるのである。」

十二、有名な「印度と其諸問題」といふ本にも同様なことが書いてある。

「數百萬の印度農民は半エカーの土地で暮して行かうともがいてゐる。彼等は絶えず饑餓と闘はねばならない。彼等にとつては人間として生きることよりも、唯生きるだけのこと死なぬことが難しいのである。」

十三、嘗て英國代議士バーセルはデリー・ヘラルドに次のやうに述べたことがある。

「印度人二億五千萬以上は生れてから死ぬ迄ひもじい思をしてゐる。彼等は充分米を食べたことがないのである。斯くて饑餓のため死ぬものは常に數千を下らないのである。」

余の印度視察に依れば、印度の基本的な第一の問題は胃の腑の問題である。此經濟問題に較ぶれば政治問題も、憲法問題も、カースト問題も、宗教問題もとるに足らぬものである。余は是等印度人に毎日少しでも多くの米を食べる様にさせたいとのみ念じてゐる。一日一片の收入増加は印度農民の生活水準を著しく改善することゝなるのである。」

十四、前印度醫務局長ジョン・メガウは全印度に亘り、營養及び保健狀態を調査し、營養よきもの三九%、不良四一%、最も不良二〇%なることを發表した。

十五、一九三四——三五年度、カルカッタ市學校衛生年次報告に於て、ステイル・ポース博士、マインドラ・ダット博士は、極めて注目すべき意見を發表したが、その調査生徒數八千名の中、約四十七%は何等かの缺陷を有することが判明した。それ等の病氣は眼、咽喉及び消化器系統のものであつた。之が内譯は眼の疾患三十%、咽喉二十三%、齒十一%、消化器十%であつたが、

栄養不良は全體の三十%に及んだ。然も之は英帝國第二の都市の學校に於ける状態であるから、農民の状態は推して知るべしである。

十六、最近カルカッタに於て開かれた極東熱帯醫學會に於て印度に於ける保健状態が注目された。而してグラハム大佐はロータリー・クラブの演説に於いて次のやうに述べた。

「印度は世界中で一番の病氣の巢窟である。印度の死亡率は英蘭の二倍であり、幼兒死亡率はその二倍半であり、ニュージーランドの四倍半である。」

第二章 英國治下の印度大衆

「然し泥でつくつた家の中を覗いてみるといふ。中には瘦せた顔色の悪い、笑ひを知らぬ人々がある。印度人の子供が紙鳶や毬を追つて走り遊んでゐるのを見たものがあるであらうか。キプリングは彼等が悲しい顔をする運命にあるものとしてゐるが、何故に悲しいのかを不問に付してゐる……」

チャールス・エドワード・ラッセル

一

嘗て世界中で最も繁榮し幸福であつた印度農民は今日重税と英國の農地制及び英國の政治の爲世界中で最も悲惨な境遇にある。また印度の勞働者も世界中で最も低い賃銀を拂はれて居り、特に英人の栽培地に働くものは極めて非人道的な待遇を受けてゐる。日本に於ける所謂低賃銀勞働

を非難する英國新聞も、印度人少年労働者が一日三仙で茶栽培地に働くことに對し口を緘してゐる。

印度村落が自給自足の生活を營んでゐたことは遠い昔のことではない。當時は支配者も村落の眞の價値を認め、其自治を許し、小工業を保護してゐた。然るに英國の中央集權制の實施と共にすべてが都市に集中され、農村の没落を見るに至つた。永年の間耕作及び小工業に依り生活してゐた村民は生活の據り所を失ふに至つた。大規模工業製品の出現は當然手工業の没落に拍車をかけるに至つた。

斯かる變化が危険なる結果をもたらすものたることは夙に印度識者の憂慮せるところであり、政府に反省を求めたが、専ら歳入にのみ關心を有する政府は是に耳を傾けようとしなかつた。

ラツセルは印度農民の狀態を次の如く描寫してゐる。

「彼等の家具といへば人民の必要の最少限度にも充たぬもので、壺一つか二つとぼろ布數枚といつた有様である。家は床も壁も泥でつくられて居る。子供は道に落される牛糞を早速拾ひ是を壁

に張りつけ乾かして燃料とする。屋根の高さといへば人の頭とすれ／＼位の高さだ。モンスーンの時雨はひどく屋外で働くことが出来ぬから皆この穴小屋に入るが、其の中は暗く濕つぽく動物でも居られぬ様なところだ。印度の農民一億五千萬は生れてから死ぬ迄満足な食物を口にすることが出来ないのである。ウエンデル・フィリップスは曰ふ「三億八千萬の中二億は充分に食べたといふことを知らないものだ」と。兎に角太陽に恵まれ、土地豊穰な印度に於いて、人口の大部分が半ば饑餓状態にある。然も、最も好況の時に於いてすら半ば饑餓の状態にあるのだ。次いで饑饉、避け得られる筈の饑饉が到來すると數百萬が生命を落すのである。數百萬と言つたが、それは決して誇張ではない。實に十九世紀以來饑饉のため餓死したものは第一次歐洲大戰に仆れた者の數より多いのである。今十九世紀一世紀間に饑饉の爲死亡せるものを二十五年宛に區切つて示せば左の様である。

年	度	饑饉日數	死亡者數
一八〇〇—一八二五		五	一、〇〇〇、〇〇〇

一八二五——一八五〇	二	四〇〇、〇〇〇
一八五〇——一八七五	六	五、〇〇〇、〇〇〇
一八七五——一九〇〇	一八	一五、〇〇〇、〇〇〇

また一九〇〇——一九〇二年の大饑饉には一〇、〇〇〇、〇〇〇人が餓死したのである。」

二

然し労働者の状態は農民に比し、一層不良で、大多数は日給三——十二仙に過ぎない。今印度苦力に就き労働調査委員チャマン・ラルの調査せるところを引用してみよう。

一、茶栽培地に募集された労働者の状態は想像に絶する。栽培主自ら警察官の如き権利を行使し、栽培地を去らうとするものに對しては凡ゆる手段が行はれる。

一九二八年六月一日二十名の苦力がジョハトン・ブサガル區裁判所に訴へ「自分等は一年の契約でアツサム茶栽培地に雇れてゐたが、賃金は少く、一週間と満足な食事をする事が出来ず、

既に一ヶ年以上経つので、栽培地を去らうと思ふが、それには契約に従ひ雇主より旅費を支給させたい」と述べた。仍つて役人は、栽培地支配人を召喚したが、次いで役人と支配人との間に秘密會談が行はれ、その結果苦力は更に一年働くことを命ぜられた。右に關しアツサム労働移民報告は、斯かる苦力に就き何等の報告を有せずと述べてゐる。

二、パーセル、ホールズワース等はアツサム栽培地労働者が事實上奴隸状態に在りと報告せるに對し、全印労働組合は、早速代表を派し調査せしめた。その結果彼等苦力の衣食住共に貧弱を極め、苦力及びその妻が常に雇主から虐待せられてゐることが判明し、また地方議會には苦力から一人も代表が出されず、茶栽培協會からのみ代表の出てゐることが判つた。苦力の生活は塵埃と病人の中で送られ、其の死亡率は極めて高い。雇主は苦力組合を組織せんとする恐れあるものは早速裁判所に突き出すのである。

三、一九二八年八月十五日ベラナ・チランガといふ苦力が裁判を受け、其の結果一年の重懲役に處せられた。彼はチンナマラ茶栽培地に同郷の苦力多數ありと聞き、其處に赴いたが、忽ち捕へ

られ迅問された。彼は働くために來たと述べたが、栽培地側は彼を煽動者とし、栽培地側で證人をつくり、警察に突き出した。栽培地側では彼が労働組合に屬するといふのであるが、彼はそんな名前も知らぬと言つた。然し栽培地側の證據提出に依り彼は有罪とせられた。

四、ルターフォード博士は其の著「近代印度」に於いて茶栽培地の状況に就き次のやうに述べてゐる。

「アッサム茶栽培地の労働者は一日九時間の仕事に就き八片、婦人は六片、兒童は三片を貰つてゐる。製茶工場では八片である。苦力は低賃銀に苦しむのみならず、田舎のことゝて食料其他のものを雇主から掛買することゝなつてゐるが、この掛買のため、苦力は他へ轉することが出來ず、一生奴隸的狀態に甘んじなければならぬ。」

五、パーセル、ホールスワース等は茶栽培地の状況に就いて次の如く述べてゐる。「我々は男女子供の働く五碼後に若い監督が鞭を持つて監視してゐるのを見た。」

六、國際紡織労働組合員フルトワングレル Furtwangler 氏は一九二七年印度を訪問の後次の如く發表した。

「印度の栽培地の賃銀は七十年間變つてゐない。一八七〇年の苦力の賃銀は一月五留比であつたが、一九二二年アッサム茶栽培地の最高賃銀が月六留比である。然かも此の間米價は倍になつてゐる。苦力の賃銀は主に米に使はれ、衣物否むしろ、ぼろのため金を出すことは殆んどない。」

七、印度政府の報告は次のやうに述べてゐる。「労働者の食物は一般に粗末で小麦粉、米、油等であるから體格も不良であるが多くは満足してゐる様だ。衣物は不潔だ。多くは文盲で子女の教育等思ひもよらぬ。協同組合の如きも、共済基金もない。大抵は高利貸に金を借りてゐる。」

然し斯かる状態に何故甘んじてゐるかに就いては一言も述べられてゐない。それは眞に彼等の欲するところだからだらうか。

第三章 この搾取を見よ

印度は昔から幾たびとなく外國の侵略を受けたが、最近二世紀間の英國の侵略ほど印度經濟を破壊したものはなかつた。クライヴ、ワレン・ヘスチングス以來の英國の搾取は、ガンデイが印度總督に送つた次の如き書簡に端的に表現されてゐる。「貴下の俸給は月二一、〇〇〇留比を算してゐる。英國首相の俸給すら年五千磅、即ち月五、四〇〇留比である。即ち貴下の所得は一日七百留比(二五二弗)であるが、印度人平均収入は一日僅か二アナンナ(四仙)にすぎない。英國に於いては首相の所得も一日一八〇留比の割合であるが、英國人一日の平均収入は二留比となつてゐる。要するに貴下は印度人平均収入の五千倍以上を取つてゐられる。余は此の事實に就き深く考へざるを得ない。余は貴下を深く尊敬し、貴下の感情を害せんと欲するものではない。余は貴下がその所得の全部を必要としてゐるとは思はない。おそらくその大部分は慈善のために用ひられるのであら

う。然しかゝる制度は端的に非難さるべきである。總督の俸給に對すると同様のことが、すべての行政作用に就いて云ひ得る。而して収入を減額すれば自然現在のところでは行政費を切り詰めてはならない。然しかゝる事は印度の「獨立」なくしては能はぬことである。印度が國民として生き、現在の如き饑饉に依る緩慢なる死を排除するためには對策が不可決である。」

エドマンド・パーク曰く、「余は英國下院の名に於いて我々の信賴を裏切りたるワレン・ヘスチングスを彈劾する。余は英國國民の期待に背き、印度を沙漠の國となした彼を彈劾する。」

印度に二十年以上居住したデグビーは次のやうに述べてゐる。
 「一、英國の印度統治始まつて以來印度人の一人當り収入は次第に減じつゝある。一八五〇年一人當り一日の収入は二片^{ペンス}であつたが、一八八〇年一片半となり、一九〇〇年四分ノ三片となつた。

- 二、収入の減少に引きかへ税金は増加し、一九〇〇年に於いて英本國の四倍以上に達してゐる。
- 三、一九〇〇年全印度人の収入の三十四日五分ノ一分が英本國に課金として送金されたが、か

かる貢納金を強要した例は史上にその比を見ないのである。

四、英國の統治以來饑饉は増加した。即ち十九世紀の最初の二十五ヶ年間の饑饉数は地方的なるもの四であつたが、最後の二十五ヶ年間には全國的なるもの二十二の勃發を見た。印度の如き大國が奴隸状態におかれ搾取を受けながら、英國の不正は全く外界に傳はらないのである。然しかゝる不正は繼續し得らるゝであらうか。英國は印度に徴兵を行つてゐないが、軍隊の反亂を絶滅するため武装の完全解除を行つてゐる。即ち英國は云はば印度人そのものを殺さず、印度人の精神を殺したのである。彼等から土地と食物を奪ひ、以て彼等を弱くし服従せしめてゐるのである。」

東印度會社が印度の統治權を握つた時、會社は教育のことなど少しも念頭におかなかつた。唯金を儲けることだけが會社の目的であつた。會社の職員は内國貿易を獨占する爲凡ゆる惡辣なる手段を用ふるを躊躇しなかつた。

モンタグー・ウエップ卿曰く、

「英國が印度を經濟的に救ふ爲、金融、通貨、貿易政策を改めるのでなければ、印度經濟は破滅の外はないであらう。

印度人の大部分は農民だ。其の村落は泥づくりの家で出來た部落で、其處には一つ若しくは二つの寺と數本の老木と一つの井戸があり、部落の周圍が耕作地になつてゐる。此處に働き、重税を課せられ、英帝國の血液をつくり出してゐるのが印度國民である。」

J・C・コトン曰く、

「英國の統治に依り人口増加せりと言ふもそれは印度の繁榮を意味しない。印度の繁榮の爲には下層階級の生活水準を引き上げるか、農民の一部を他の職へ轉じさせることが必要であるが、英國は從來何等斯かる政策を執つてゐない。従つて下層階級の狀態は英國統治以來惡化してゐるのである。」

A・O・ヒュムは曰ふ「極く天候のよい年の他、大部分の印度人は人並の食事をすることが出來なす。」

ハリントンに依ればウード州民の六割は子供を働かさねば飢えんとする状態にある。」(一八七六年)

ローレンス曰く「印度の貧困階級は半ば飢えてゐるが何等の救済策がない。」(一八九一年)

ハインドマン曰く「印度は次第に衰弱し、大衆自體次第に滅亡し去らんとしてゐる。」

リリー曰く、

「國民の繁榮は都市の建設、工業家の増加、輸出の増加等を以て計り得ず、大衆が適當の勞力で人間らしい生活を送つてゐるか如何かといふにある。印度は此の意味で果して繁榮してゐるだらうか。勿論熱帯にある印度では生活水準は低く、衣物を要せず、食事も簡單なものが攝られる。故に水の豊富な井戸、少しばかりの耕地と果樹畠があれば農民は満足し、それに家畜でもあれば猶更よいが、是は農民の理想では是を實現してゐるものは稀である。」

印度幾千萬の農民は半エカールの土地で生きてゆかねばならぬ。自然常に飢えと戦つてゆかねばならぬのである。」

英國は被征服國を統治するに被征服民の幸福の爲「白人の負擔」を敢て荷ふものであるといふが、是程皮相な言はなく、英國は印度其の他の被征服國統治に依り商業的、政治的、軍事的、且つ精神的、社會的利益を得てゐるのである。

印度は農産礦産資源に富んでゐる。印度は世界の黃麻産額を獨占する。印度は英帝國消費小麦の五一%を産出し、茶は五八%、珈琲は七三%、棉一〇〇%を産出し、また世界有数の産米國であり、且つ印度の輸出貿易は世界屈指だ。また石炭及び鑛物に富んでゐる。若し印度が獨立して居れば、勿論毎年の饑饉の如きは全然あり得ないであらう。然るに英國は自國の産業維持の爲印度の資源を獨占すると共に、他方印度を政治的權力を以て自國製品の獨占市場たらしめてゐるのである。

英國の貿易の六四%は印度貿易である。勿論是には英國の對印投資に對する配當利子(それは英國數十萬家族の収入の源となつてゐる)は含まれてゐない。因みに一九一三年に於いて既に英國の對印投資は三億五千萬磅を算してゐた。

對印企業資本は總て倫敦に於いて起債され、また印度政府の獨占到屬する鐵道材料はたとへ英國品が高價で獨逸製品等に劣る場合でも殆んど英國から供給せられた。

印度の金保有はすべて英國銀行に預けられる。而して英國は印度金融市場を支配するが故に、印度が銀貨國たることと相俟ち、毎年莫大な利益をあげて來たのである。

印度に於ける高級官吏はすべて英人であるが彼等は在印中巨額の俸給を受けるのみならず、歸國後は年金を受けるのであつて、その額は年二千萬磅に達するのである。また民間商社の英人から英本國に送金せらるゝ額も二千萬磅に達するとされてゐる。即ち四千萬磅が英國に送金せられるが、印度人はそれだけ窮乏してゆくわけである。年一人當り所得二磅の印度人は斯かる大金をつくれさうにもないが、英國は過去六十年間（東印度會社時代のことは別とし）かゝる搾取をつづけてゐるのである。それは毎年英人一人々々に一磅づゝを呉れてやると同然であるから、印度の窮乏に引きかへ、英國の繁榮は當然である。

ソルボンヌ大學教授デマニオン博士曰く、

「英國の印度支配は植民地搾取の典型的なるものを示す。資源豊富人口多き印度は英國にとつて財産であると共に其の活力である。英帝國の運命は印度あるにより安固たるものがある。印度は英國の極東貿易の休息所だ。印度は英國海軍にとつても好箇の休息所である。印度人は英國陸軍の有力な兵として支那や南阿に戦ひ、第一次世界大戦には印度人百萬の出征者中十萬の戦死者を出した。印度の輸入品の三分ノ二は英國製品だ。英國は印度の鑛山、栽培地、工場、鐵道、灌漑事業に莫大な投資をなし、年三億五千萬磅の利子を支拂つてゐる。英國人高級官吏に高い俸給と年金を拂ひ、英國の統治費を拂ひ、其の公債の利息を拂はねばならぬ。毎年英國株主、銀行、官吏に支拂ふ金は三億磅以上に達してゐる。」

印度は毎年歳入の四割を軍事費に使つてゐながら、印度には徴兵制なきがゆゑに軍國主義に非ずと稱してゐる。然しカーゾン卿は嘗て印度軍は常に戦備を整へ、命令一下亞細亞または阿弗利加の何處へでも赴く用意ありと述べた。而して第一次世界大戦の際獨逸はまさか印度軍が亞細亞、阿弗利加以外の歐洲にさし向けられようとは夢想だにしてゐなかつたのである。

英國は毎年印度に青年をおくり、軍隊に編入し、短期の教育を行ひ、英本國へ送るので數年にして數十萬の青年が軍事教育を受けることになるが、其の往復の費用はすべて印度の負擔するところである。

斯くて印度人は年々奴隸の状態にあり、其の生存年齢は僅か二十三歳に過ぎぬ。是に反し英國は印度よりの富のお蔭で社會的知的生活を向上し、其の上中階級は教養と高等教育をなす餘裕を得てゐる。英國の詩人は印度の生ける屍を踏みつけ乍ら自由の歌を唄つてゐるのだ。故に英國政治家が英帝國を讚美するのは蟲が腐肉を讚美するに等しい。印度が英帝國の巨柱だといふ考へは英國労働者の頭にも込み込んでゐる。マクドナルド内閣の下に於いて最も彈壓的法令が發布されたのは何を語るものであらうか。英國共產黨の領袖も「白人の負擔」を説き、左翼社會主義派たる獨立労働黨の領袖も次のやうに述べてゐる。

「吾人は労働黨政府が印度を手放すとは思はない。獨立労働黨は印度が欲すれば手放しもしようが、印度が英國から獨立を欲してゐるとは思はぬ。」

世界一の金持國たる米國の軍事費行政費は豫算の四八・八%であるが、印度では九三・七%である。然も米國ではそれが國內に撒布されるが、印度では英國に大部分が持ち去られるのである。

地租は作物出來高の六割乃至八割に及ぶが、ガンデイはせめて五割にせよと説いてゐる。

是を要するに印度は年々英國に四億五千萬留比を、過去百二十年間に實に五百四十億留比を買がされてゐる（政府統計による）。印度が貧しく、革命の起るのは當然である。然も英國は印度に大軍をおき、人民を威壓するのみならず、是を英帝國外の戦線へも送るのである。

ウエッジウッド・ベン元印度相は嘗て議員の質問に答へ、英國將校四千三百六十二名が印度より年金を得てゐる（其の額二、六八三、九五八磅）と述べた。（文官にして年金を受くるもの三、一三六人其の額一、六一七、七一九磅）」

英人ダチエスは曰ふ、

「英國は印度を必要とする。印度なくば、今日の英帝國はないであらう。エリザベス時代以來印度は英國の必要とするものを供給して來た。印度なくばランカシアは亡びるであらう。」

第四章 英國の「分割支配」政策

分割支配 *Divide et impera* 政策は古代羅馬のモットーなりしもそはまた我が英帝國のモットーたるべし。

エルフィンストン卿

一

英帝國が印度を征服して以來世人は絶えず回教徒印度教徒の葛藤に就いて聞かされてゐる。然しそれは分割支配政策が表面に現れた結果に過ぎない。

故アンニ・ベザント夫人は其の逝去の数ヶ月前次の如く述べた。曰く「回印兩教徒は、第三者（英帝國）が印度に在る限り繼續するであらう。蓋し回印相對立せしむることは第三者にとつて有利だからである。然し回印兩教徒は今や第三者の策略を知るに至つた。」ラムゼイ・マクドナル

ド、オリビエ卿の如き英國人すら同様のことを述べてゐる。然し狡猾なる英國は、英國が回印兩教徒の争鬭を防止してゐるのだと宣傳してゐる。この點に就いては、英國の宣傳機關は確かに印度の宣傳機關より上手である。印度は昔から宗教の自由を認めてゐる。二千二百年以來印度に於ける猶太教徒は、一度も迫害せられたことがない。またアクバル大帝の如きは、印度各種の宗派をして共通の問題と相互の差異等を討議せしむるため、大會議を開いたことがある。所謂回印間の問題は、決して宗教的な問題でない。それは一部爲にせんとする者の造り事であつて、回印兩教徒の九割は數百年來互に提携して暮してゐる。

印度に三十二年間勤務した英人C・H・バックは曾つてソルスベリー卿が回印相排しつゝありと述べたることを反駁し、テレグラフ紙上に次の如く述べてゐる。「兩教徒の間は圓滿であり、パンジャブ州の多くの村落に於いては、回教徒が印度教徒の慣習をそのまゝ行つてゐる。また一家族の中には或者に印度教徒の名前を、或者は回教徒の名前を付けるといつた者が少くない。回教徒にして、疫病流行當時印度教の寺に參詣する者があり、印度教徒にして回教寺院に參詣せる

例も知つてゐる。故に兩教徒間に激しい對立があるといふは根據なきことである。」

余もまた印度評議員ハヤト・カン・チュワナ卿が、印度教徒の研究所に寄附をなし、また印度教徒が回教寺院若しくは學校に寄附をした例を知つてゐる。

二

要するに所謂教派間の争ひは、英國の政策に起因するものであつて、この事は以下示すところに依り明かである。

一、ラムゼイ・マグドナルドは「印度の覺醒」に於て、次の如く述べてゐる「官吏が回教徒領袖を唆かし、教派間の争ひを發生せしむるに至つた疑ひがある。」

二、マクドナルド内閣の印度事務大臣オリヱイ卿は、タイムズ紙に書簡を送つて曰く「印度問題を熟知する者は、官憲が回教徒に同情し、印度教徒の國民主義に反感を持てるところから、回教徒を偏愛し勝ちであることを否定し得ない。」一九三〇年ベンゴールに於て國民運動最盛

の時、回印擾亂が發生せるは斯かる事情に基くのである。

三、マノーヴン・ウイリアムス夫人曰く、「政府が回印の對立を唆かさないとすれば、如何なる理由に依つて英領印度にのみ擾亂が起るのであらう。」然るに英國政府は斯かる非難をさけるため、爾後カシミル及びアルワル兩王侯國に於いても回印の對立を刺戟するに至つた。而してアルワル王侯が兩教徒の融合を計らうとしたところ、英國政府は彼を追放するに至つた。

四、G・ワルトン中佐は次の如く述べてゐる。「ソルスベリー卿は、共同審議會報告の保障を輕視してゐる。而して卿は回印兩教徒の對立を説き、これこそ過去現在未來に亘り、英國の印度支配にとり最大の保障だと説いてゐる。然るに今報告案に依るときは、回印兩教徒は融合することとなり、印度は遂に英國の手を離れるであらう。」

五、既に一八二一年一英人官史は、カルナテカスの名を以て亞細亞評論五月號に「分割支配政策は、政治的軍事的に英國統治の基幹たるべし」と述べてゐる。

六、大兵亂當時ジョン・コーク中佐は次の如く述べた。「我々は相異なる二つの宗派の對立を計

り、決して融合せしめてはならぬ。印度統治の原則は、分割支配でなくてはならぬ。」

七、一八五〇年當時ボンベイ州の知事であつたエルフィンストーン卿は「分割支配策は、古代羅馬のモットーたりし如く、また我々のモットーたるべし」と述べた。

八、ジョン・ストラチエー卿曰く、「印度人間に相對立せる教派のある事は、英國の印度統治上一つの強みである。」

九、曾つての英國高官A・O・ヒュームはガンデイに對し、英國は分割支配策に依つてその統治を保つてゐると告白した。

十、嘗てベンゴール副知事バンフィールド・フライー卿は、印度政府は回印の二人の妻を有すると述べ、また回教徒の方がお氣に入りであると述べたことがある。然し英國政府は、回教徒が印度教徒と共に獨立に邁進する時、決してその「お氣に入り」にも容赦をしない。西北境州に於ける回教徒が他州の印度教徒よりも著しく彈壓されてゐることは周知の事實である。

十一、ジョン・メイナード卿は、次の如く述べてゐる。「英國は回印相對立することなくしては、

印度の領有を續け得ないこと勿論である。然しこの對立は英國統治開始と共に出現せるものである。もとより英國の侵入前にも專制的君主が虐政を行つたことはあつたが、回印兩教徒は相提携し、同一の寺院で禮拜してゐたものである。」

第五章 英國の偽瞞政策

「英國人に信義はない、英國は印度の教派と教派とを對抗せしめてゐる。印度の自治の爲に盡瘁するベサント夫人は第一次歐洲大戰の際『英國の不利は印度に有利なる時』とし自治運動を開始したが、我々は英國政府を信じ是に反對した。其の際英人であるベサント夫人は『卿等は英國人を知らぬ』と言つたが夫人の言が正しかつたのである。今日行はるゝ彈壓の如き我々は英國治下に於いてあり得べしとは思はなかつたものである。最後に我々は今や人間でなく、獸の心を持つたものと取引しなければならぬことを知つた。」

マラビア

「我々は新しき統治機構をつくらんとしてゐる。然し人民が名實共に『統治階級』に入らなければ、腐敗せる基礎は上部構造を破壊するに至るであらう。」

ラムゼイ・マクドナルド

英國の印度統治史は約束破棄と不信の歴史である。英國は危機に際し重大なる約束をなし、危

機去れば是を弊履の如く顧みざる點に於いて世界的定評がある。印度が英國の爲に支那、アフリカ、歐洲、メソポタミヤ、アラビア、アフガニスタン、チベット、ビルマ其の他に於いて戦つたことは世界公知の事實である。第一次世界大戰の時だけでも印度は一億千三百六十萬磅を獻金した。加之、國外に派遣せられた印度軍の爲に三千三百二十萬磅を支出した。この世界大戰に仆れた印度兵六萬七千、負傷者六萬七千に達する（印度議會に於ける報告より）。

印度は第一次世界大戰當時將來の自治を約束されたが故に是だけの犠牲を忍んだのである。然も其の代償として現れたものは戒嚴令同様のローラト法と、戦後數ヶ月にして行はれたアムリツサアルの大虐殺であり、其の他各地に於ける銃射、大量投獄事件であつた。それらのものの中には十歳から十二歳の少年が、英國王に逆心を抱くとして罪に問はれたものがあつた。加之一九二一年より一九三七年迄に二十五萬人が投獄され、三千人が銃射を受け、數千人が笞刑を蒙り、或は馬蹄の下に蹂躪せられた。然も從來英皇帝及び閣僚は印度に就き次に示すやうな言を發して來たのである。

一九二一年五月十五日印度總督に對する英帝の聲明に於いて次の如く言はれてある。

「印度が自治領の中に加へらるゝを目的とする旨議會が決定せるは欣快に堪へざるところなり。」

一九二八年七月二日時の英國首相曰く、

「余は數年以内でなく、實に數ヶ月内に今一つの自治領が出来ると思ふ。其の自治領は他民族の國であるが他の自治領と同様の地位を得るであらう。其の國とは印度のことである。」

爾來數ヶ月どころか十數年経つても自治領の氣配すら示されなかつた。

一九二九年十月三十一日アーウィン總督（現在のハリファックス）は時の英國内閣を代表して次の如く述べた。

「一九一七年の宣言に含蓄せられるところは印度の憲法的發展の當然の結末が自治領制の達成にありとの意味である。」

印度の青年は彼等の指導者が此のクリスチャン總督の言を信することに反對したに拘らず、指導者は是に信賴したが、其の結果ガンデイは失意の裡に圓卓會議より歸り、忽ち投獄されねばならぬことゝなつた。

一九二九年十一月七日ポールドウインは英國下院に於いて次の如く述べた。

「印度に責任政府が確立される時如何なる自治領制が生れるか豫斷し得ぬが、それが劣れる性質のものでないことは確かだ。吾人は印度人が劣れる性質のものに満足するとも思はぬ。而してそれが劣れる性質のものならば我々の印度統治は失敗といふべきである。」

然も新憲法は果してポールドウインの言に背かないものであらうか。新憲法は印度に責任政治を許與するものといはれるが、自治領制に就いてすら一言も觸れられてゐないのである。

一九三三年八月二十八日ウィンドン卿曰く、「政府の政策は他の自治領同様の達成に向ひ印度統治の改革を進むると共に、治安の確立を計るにある。」

次いで同年マドラスに於ける演説に於て曰く「余の總ての行動は唯一つの目的、即ち平和且満足すべき雰囲気をつくると共に、印度をして帝國內の平等なる自治領たらしむべく憲法的發達を計ること——に従ひ行はれて來たのである。」

英國は果して印度が平等に地位に置かれてゐると思つてゐるのであらうか。

チャチルは一九二一年の英帝國會議に自治領相、植民相として次の如く述べた。

「今日印度は有力なる盟國として此の會議に臨んだ。吾人は一九一四年フランダースの戦線の兵力缺乏せる時、印度軍二軍團が聯合軍を援助せられたことを想起せざるを得ない。吾人は印度に負ふところ多いが、印度が何時の日にか完全なる自治領制を得んことを深く期するものである。」

然るに其後十年を経てチャチルは英國兩院協議會の席上「右は儀禮的に述べられたものである。儀禮的に世辭を言ふことはどの政治家でもやることだ」と公言した。更に彼は曰く「如何なる時と雖閣僚が印度に自治を賦與するなど考へたこともなく、欲したこともない。」

吾人は英國の政治家の低調なる橋詐、偽瞞に寧ろ憐憫の情をすら催すものである。

一八七八年五月三日時の總督リットン卿曰く「印度政府は是迄常に約を破つて來たことに對し満足なる辯解の辭を持たない様に思はれる。」

今回の新憲法も亦例の如く英國の前約破棄の偽瞞政策を現はせるものである。

「過去百五十年間英國は、國民教育に於て何等の措置を講ぜず、今日の印度に於て読み書きし得る者は、英國侵入當時に於けるよりも少い。また英國侵入前の方が印度人は富み榮えてゐたのである。一七五〇年頃まで印度の村落には必ず學校があり、人口の六割は読み書きが出来たのである。然るに今日九割即ち三億二千萬が文盲であつて、過去百五十年間読み書きなし得たものゝ總數は二千二百六十萬にすぎない。かゝる英國が果して印度を統治するに適するであらうか。」

チャールス・ラツセル

「一八三五年の政府統計に依れば、人口四百に就き必ず一つの學校があつた。教育の普及は宗派間の對立の如き解消するに最も効果がある」

ライオネル・スミス卿

第一次世界大戰にアメリカを引入れた英國の巧妙なる宣傳機關は、世界に對し、印度人は英國の侵入前より文盲であり、今日も人口の九%が読み書きし得るにすぎないから、印度は自治に適合せぬと稱してゐる。

此の宣傳は一時は世人を誤魔化し得るかも知れぬが、史家は將來必ず英國の虚構なる宣傳の罪

を指摘するであらう。英國は過去二世紀間に印度人の読み書きし得るものゝ率を六〇%より九%に低下せしめた。日本は七十年間に被教育者率を九九%に引上げ、露西亞、土耳其は十年間に著しき効果をあげたが、英國は印度に於いてマイナス五十二%の効果をあげたのである。然も英國は厚顔にも印度に文明の初歩を教へつゝありと説く。

ケア・ハーデイ曰く「マックス・ミュラーの調査によれば英國の侵入前ベンゴールに八千の小學校があり、全印度に亘り子供の読み書きを教へるところがあつた。然るに今それらは何處へ行つたのであらうか。」

英國は印度三億八千萬の國民が、外國から併合されぬやう、その幸福を計るため統治すると云つてゐる。また英國の或る宣教師は、英國の印度統治が神の命に従ふものであり、之を放棄し得ないと云つてゐる。果して左様であらうか。故ロバート・ナイトは云ふ。「印度から利益を得てゐるのは英國の商人のみではない。印度總督及び知事は英國貴族の野心的であるが、その外に英人副知事、顧問、判事、徴稅官等何れも莫大な收入を受けてゐる。又印度には千乃至千二百の英

人醫師があり、その實力の如何に拘らず莫大なる收入を擧げてゐる。また教會、學校、印度軍、鐵道すべてに於いて英國人は高い地位に就いてゐる。」

シジウィック少佐は曰ふ「我々が印度を失へば英國の東亞貿易は亡びるであらう。印度が我々の手から離れたら、我々は市場を失ふだけでなく、印度は豊富なる資源と低賃銀勞働を以て東亞の市場を獨占するに至るであらう。」

ウリアム・ジョインソン・ヒックス卿は曰ふ。「我々は劍を以て印度を征服したのであるから劍を以て是を保有せねばならぬ。」

ジョージ・チエズニー卿曰く「印度は我々にとつてパンとバターも同様であるから、是を手離すわけにはゆかない。」

アーサー・ムア卿は曰く「英國は最初貿易を目的として印度に來たが、次第に貿易よりも寧ろ印度の爲統治することを考へるに至つた。而して此の責任は英國人の才能に働き場所を與へるのである。學校卒業者は印度に於いて尊敬すべき職に就くことが出來、他方英國民に稅の負擔をか

けず軍隊を養成することが出来る。

我々は印度を印度人以上に愛した。然し今や印度のために統治するといふ觀念は消滅しつゝある。英國には失業問題があるに拘はらず、印度に赴くものは少くなつて來た。印度に於て英國官憲を惡魔と叫ぶ國民運動が勃興し、英國商品はボイコットされ、英國輸出業者、工業家は低賃銀の武器を有する印度人と競争しなければならなくなつた。然も猶我々は印度が好きで、是を手放してはならぬと考へるものである。」

チャールズ・エドワード・ラッセル曰く「我々は英國が印度の爲を計り、印度人が感謝してゐるといふ事を聞く。然も百六十年に亘り恩恵をうけながら、印度人は其の主を倒すべく起たんとしてゐる。政府が善政を行つてゐるのに、人民が絶えず其の支配脱却を計劃しつゝあるといふことは果して考へ得らるゝことであらうか。」

第六章 赤裸々の英帝國

英國は過去一世紀半に亘り英國製品の市場たらしむべく印度に搾取の道をつくつた。英國は白人の官吏軍人を贅澤に暮させる爲に印度人を貧乏にした。南阿の土着民は印度人の九割より遙かにましな生活を送つてゐる。カルカッタやボンベイの街では家のない數千の人々が夜街路に眠つてゐる。

ヴァン・デル・メリブ博士

英國の印度統治は世界中で最も低級且つ不徳な政治である。

ルターフオード

一

世界の人々は英國が印度に於て善政を施しつゝありと屢々聞かされてゐる。然し斯ういふことを宣傳する御用黨の言が眞であるか如何かは次に示す正直な英米人其他の言に依つて判定せられ

るであらう。

ラムゼイ・マクドナルドは左の如く述べてゐる。

「印度に於て英國は心の中で拒否してゐることを口の上だけで述べてゐるといはれてゐる。英國の缺點は腹藏なく言はぬことである。我々は與へるものは腹藏なく與へると言はねばならぬ。

我々は印度からあまりに多くの金を引き出し、印度の發達のためには極く僅かしか使はなかつた。教育費の如きその適例である。

上ビルマ併合に要した費用も印度人の負擔とせられたが、我々は之に對し何等償ひをしてゐない。何でも彼でも印度人に負擔させる事は決して男らしい事ではない。印度軍事費の九割までは英帝國のため使はれるのである。カナダ、南阿、オーストラリヤも亦印度並に負擔すべきである。印度が多額の費用を負擔しそのお蔭で保護されてゐる之等自治領が、印度人の入國を拒んでゐるのは實に皮肉である。印度はアデンの費用、亞細亞各國に派遣せられて居る英國大使の費用をも負擔しなければならぬ。印度はまた先帝の戴冠式の際英國が招待した代表の費用をも負擔し

なければならかつた。

印度人は世界中最も勤勉であり、土地は肥え、作物は豊かであるが、饑饉が來れば幾多の人命が犠牲にされる。ウイリアム・ハンター卿は、四千萬の印度人が生涯十分な食物を攝り得ないと云ひ、チャールス・エリオット卿は、農民の半分が年がら年中ひもじい思ひを忘れたことがないと云つてゐる。印度に於て三千萬乃至五千萬家族が、その収入一日三片半以下である。一九〇〇年七月の官報に依れば、一日六百五十萬人に對し饑饉給費が與へられた。印度の貧困は意見ではなく事實である。景氣の良い時でも農民は負債を負つてゐる。一九〇一年の饑饉委員會報告に依れば、ボンベイの農民の四分の一が借金のため土地を失ひ、借金のない者は五分の一以内とせられてゐる。要するに從來の政府は獨裁の政治を行つてゐた。」

過去百五十年間英國は、印度大衆の貧困を救ふどころか、搾取する一方であつた。従つて彼等の家といへば、縦十二呎、横十四呎位の小さなもので、窓もなく戸口にはアンペラか布があるだけである。アメリカでは豚小屋も之程悪くはない。

ジョージ・ウインゲート卿曰く「我々が印度人のためではなく、我々のため統治し來つたものとするれば、我々は神の前に恥ぢなければならぬ。特に英國の經濟政策は最も非難さるべきものである。」

モンゴメリー・マルチン曰く、「印度に對する搾取が如何にひどかつたかは勞働者の日給二片乃至三片なりしを見るも明かである。」

英國膨脹論の著者シーリーは曰く「外國に永らく屈從する時は、國民の滅亡を來すに至る。」
ルターフォード博士は其の著「近代印度」に於いて次の如く述べてゐる。

「印度窮乏の主因は、英國の政策に在る。英國の印度統治は、英國の利益を計る上に於いて能率を上げてゐるだけであつて、印度及び印度人のためには全く無能である。その證據となるものは次の如きものである。大衆教育、村落に於ける衛生設備、秩序維持、貧困者宿泊所設備、高利貸より農民を保護する機關農業銀行の設備、印度産業の振興、英國鐵道利權家に對する監視、電燈其他の公共設備、是等當然なさるべきことが全然行はれてゐないことは、明かに英國の無能を證し

て餘りある。」

ウイルフリッド・スカウエン・ブランドはリットン卿の親友であり、卿の印度總督時代に印度に來て印度問題を研究した。彼は保守黨に屬し、英國の對印政策を辯護せんとし、總督府の高官その他よりあらゆる資料を蒐集した。然るにも拘らず、彼は英國の印度統治に失望し、それが結局印度のために幸福でなく、印度を破滅せしむるものであるとの結論に達した。彼は次の如く述べてゐる。

「余は印度に失望した、そこには他の亞細亞諸國に於けると同様惡政が行はれてゐる。印度に於て、英國人の所謂土人は脅かされ、やせ細つた不幸な奴隸である。余自身は歷乎とした保守黨員であり、且つ倫敦カールトン俱樂部員であるが、余は此の隸屬状態に驚き、英國の制度と英國の統治の祝福に關し大衝擊を感じたことを告白する。余は最も優れた先輩、政府官吏、委員會その他に依つて印度財政の祕密を研究しつゝあつたが、今日の状態を以て進めば、印度人が早晚人肉を食ふ時代を來すといふ結論に達した。蓋し他に食ふものがなくなるからである。」

ジョージ・パーナード・シヨウは印度の現状に就き、スワラジは終局の目標でなく、印度の新しき歴史の序曲だとしてゐるが、印度國民主義に就いては「國民主義の本能は外國の統治下にあるものに於いては當然生ずるもので、宛かも怪我をしたものが怪我の治る迄それ以外の事を考へ得ないと同様、其の國民は國民主義以外のことを考へ得ないものである。」と述べてゐる。

第七章 英國の印度侵略史

一

多くの人は英國の今日の地位を獲得せる上に印度が如何に重要な役割を有するかを理解することなしに、印度を「英帝國の王冠」の最も輝しき寶石と稱する。然るに二百萬平方哩に達する印度の搾取こそは、英國をして歐洲の覇權を制せしめたものであり、印度人三億の市場を制御せることこそ、英國の工業を刺激し、十九世紀初期に於て他の凡ゆる競争者に打ち克たしめ得たのである。

資本主義的英帝國主義は印度の搾取の上に打ち樹てられたものであるが、その形態は英國の經濟發達段階の如何に依つて異つてゐる。即ち十七八世紀に於ては専ら印度の富を略取し、その蓄

積を以て工業資本を得、十九世紀に於いては印度の富を搾取する一方、印度をして英帝國の製品の主要販路たらしめたのである。今日印度人の勞力の搾取及び英國の投資は英帝國の凡ゆる權力によつて擁護されてゐるが、是こそ印度搾取の最後の段階であつて、その中には既に自壞の萌芽を保藏してゐるのである。

三億八千萬の印度人に對し、在印歐洲人は二十萬に過ぎぬが、葡領及び佛領に屬する小面積を除き、悉く英國の支配に屬してゐる。所謂王侯國は名目上王侯の主權下にあるが、彼等は事實英國の有給使用者に過ぎず、「最高政府」たる英國の意に従はざる限り、其の地位、高給を失ふべきことは彼等の最もよく知るところである。王侯國は印度封建制の遺物であり、英國權力の支持なくば、新しき政治經濟制度の發達と共に當然消滅すべき存在である。自然彼等の保護者に對し忠誠を示さざるを得ず、一般印度人に對し常に反動的役割を演ぜしめられてゐるのである。

王侯國領土は全印度の三割九分に當るが、其の人口は印度人口の二割三分に過ぎない。其中最大の王侯國はハイデラバード國であり、面積は伊太利一國に匹敵し、人口千五百萬を算する。王

侯國の國防、外交は全く英國の手中にあり、内政上に於ける地位も英領印度と同様の地位にある。ヘンリ・コトン卿は王侯の地位に關し次の如く述べてゐる。

「封建王侯の地位を餘り高く考へるのは同情のない見方である。彼等は自らを守るに無力であり、上訴すべきところもない。彼等の利益を監視する輿論もない。理論上は英帝國主權より獨立してゐるが、事實は全然その支配下にある。その位階勳等は彼等の王宮に英國を代表し駐在する英國官吏がシラムの英國政府と秘密に打合せ、勝手に與へるものである。」

人口二億八千萬以上、面積百萬平方哩以上に達する英領印度は英國政府の直轄統治地であり、是を支配するものは英國官吏、就中總督を指揮命令する印度事務大臣である。總督は印度皇帝即ち英國王に依り任命せられ其の任期は五ヶ年である。

一一

印度に達する海路は一四九八年喜望峰を廻り印度西岸カリカットに達したヴスコ・ダ・ガマに依

つて發見せられた。其の結果印度人と葡萄牙人との交易が始まり、十六世紀を通じ、葡萄牙人はカリカット及び其の對岸に倉庫や商社を建設した。是に次いで和蘭人が來印したが、間もなく、印度の絹織物、綿織物、阿片、香料等の商賣の儲かることを聞き込んだ英國人が、その利益に均霑せんとして來印するに至つた。

一六〇〇年末倫敦の商人は東印度會社を設立し、印度に於ける英國の貿易を獨占する特許狀を得、その特權は斷續はあつたが一八一三年迄是を享有したのである。當時に於ける對印貿易といへば、印度人の手工業者から、無理矢理に安値を以て買ひ取つた品物を歐洲に送ることであつた。而して印度手工業者はその生活程度の低いこと、その製品の對外價値に就いて無智であつたことの爲、易々と犠牲に供せられ、東印度會社は莫大な利益をあぐるに至り、その配當は年十割乃至二十五割に及んだのである。

最初の中會社は封建王侯より商租地として小面積の土地を借入または購入したが、纏て彼等は其の權益を守り、また競争會社に對抗する爲城塞を築くに至つた。一六三九年會社は始めてマド

ラスに相當面積の土地を獲得し、茲に聖ジョージ城塞を築いたが、更にチャールス二世は葡萄牙王より得たボンベイの土地を一六五八年會社に交付した。

會社は間もなく競争者を驅逐する方策を執り、流血の慘事を起して先づ葡人、蘭人を追つたが、一六六四年設立された佛蘭西の東印度會社は強敵であつて、印度爭覇を廻る英佛の確執は十八世紀に於ける兩國對立の樞因となつたのである。纏て印度ムガル帝國の壊滅、各地方王侯相互の抗争は、外國會社が陰謀術策、賄賂を以て土地、權力、商權を得るに格好の機會を供した。就中佛蘭西は各地方王侯を利用する戰術に最も長けてゐたが、英國も纏て是に匹敵するに至り、殊に本國政府より資金、兵器の潤澤なる供給を受けてゐた。英國の遠征はカルカッタを根據とし一六八六年に行はれ、その後印度人傭兵を以て大部隊を編成した。

三

印度に於ける英國の領土擴張の基礎は東印度會社書記であつたロバート・クライブが南部に於

いて佛軍を敗りベンゴールを支配し得るに至つたことに依つて確立せられた。それは一七五七年ブラッシーの戦に於いてクライプが印度王軍の將領を買収したことに依つて得られたのであるが、一方彼はベンゴール王に擁立せられた叛徒から多額の金を支出せしめたのである。クライプ自身地代収入年三萬磅の他二十萬磅の金を得たのである。而して此の傀儡王の擁立と、彼に一部の土地所有權を名目的に認める外、ベンゴールは事實上東印度會社の支配下に歸したのである。

臆てベンゴール初代總督クライプの行動は東印度會社諸職員も亦是に倣ふに至り、次の如き結果を生ずるに至つた。

東印度會社は印度の政治的支配の他、茶の貿易、支那貿易を獨占するに至つた。然し沿岸貿易並に國內貿易は會社高級社員の獨占するところとなつた。鹽、阿片、其の他の獨占は莫大な利益をもたらした。社員等は自ら價格を決定し、不幸な印度人を勝手に搾取した。洵に鍊金術師も及ばぬ巧妙さを以て無より金をつくり出すのである、故に一日にして大財産が出来た。ワレン・ヘスチングスの審問の結果斯うした事實が無數に現れた。例へば、スリバンといふ男は阿片管區から

他へ轉任するにあたり、阿片契約權をピン某に四萬磅を以て賣却した處、ピン某は是を即日六萬磅で他へ賣却した。然も最後に此の契約を實行したものが猶且つ莫大な利益を得たといふことである。また英國議會に提出された表によると一七五七年より一七六六年迄に會社及び社員が印度人より貢納金として受領した金額は六百萬磅に達してゐる。更に一七六九年より一七七〇年に亘り英人は米を買占め法外の値段でしか賣らなかつた爲事實上饑饉がもたらされたのである。

マコーレイはクライプ卿に關する論文に於て東印度會社の統治狀況を左の如く活寫してゐる。

「社員は會社の爲でなく、自分達の爲、凡ゆる内國貿易を獨占した。彼等は土着民をして安く賣らしめ、高く買はしめた。彼等は土着民の若干をその部下としてゐたが、是等のものが現れるところには必ず荒廢と恐怖がもたらされた。是等英國人社員の部下はその主人の權力を振廻し、その主人は會社の權力を振り廻した。カルカッタでは莫大な産が容易に出来たが、他方三千萬の人民が極貧の底に苦んでゐた。」

英國の侵入前、印度に於ける支配階級の經濟力は、村落より徵集する地租が主なるものであつ

た。然し村落は自ら資力なきが故に支配者が灌漑の世話をしなければならなかつたが、土地の絶對所有權といふものはなく、收獲は耕作者と國王乃至國王が地租徵集官として任命せるもの間に分配せられた。

收獲の中から支配者に納むべき割合は各地方及び各時代に依つて異なるが、ヒンドウ帝國時代は概ね收獲の六分の一と定められ且つ現物收納を認められてゐた。其の後地租は増加せられたがアクバル帝の時代（一五五六年—一六〇五年）行はれた土地及び生産力に關する調査の結果收獲價格の三分ノ一を現地にて政府に納めることゝなつた。更に其の後印度帝國が没落に瀕するや收稅史は漸く人民を誅求し、十八世紀末に至ると農民は收獲の半以上を地租として納付することを強要せられたのである。

英國が印度を統治するに至ると新しき時代が始つた。是より先既に村落長老の地位は漸く變化し、村民の信賴する公吏は王の官僚的代理となると共に、他方に於いては大地主、ゼミンダル（地租徵收を引受ける地主）の手代となりつゝあつた。

印度帝國の崩壞は中央政府の重要な機能をおろそかにしつゝあつた。即ちその機能とは印度農村にとつて最も重要な灌漑設備の維持發達といふことである。

四

一七六五年ベンゴール、ビハル、オリッサを手始めに東印度會社が印度各地を支配するに至ると共に、古くからの此の社會設備は次第に荒廢に歸せしめられた。然も會社役員は舊支配者の建設せる灌漑設備を維持しようともせず、また地租の根柢となつてゐる此の社會組織を理解することも出来なかつた。土地收入に村落が共同して責任を有つことを無視し、村落經濟には全く新しい英國式私有財産制が植ゑ付けられた。既にゼミンダル、徵稅吏は大地主とせられ、農民より出来るだけ税を絞りとる様に仕向けられた。また他の地方では土地有力者を新たなゼミンダルとなした。而して今や新たに登記され地主となつたゼミンダルは會社に一定の税を拂ふ他は土地及び耕作者に對し完全な自由權を獲得し、土地の賣却抵當をなし得るに至つたのである。而して右に伴

ひ一種の手代制度が発生し、農民は是等總てのものに對し自己の勞働を以て貢を納めなければならなくなつたのである。

一七七二年ベンゴール參議會議長が會社理事會に宛てた書翰に曰く、

「收税員はゼミンダル、大農より出来るだけ收入を擧げること計るも、ゼミンダル、大農は彼等の使ふ小農より出来るだけの收入をとる權利があるわけである」

斯かる政策を執つた結果、一七七〇年ベンゴール州に於いて印度歴史上未曾有の大饑饉が発生するや、千萬人が餓死するに至つたが、會社に對する税は依然として徴收されたのである。

一七七〇年五月九日カルカッタ理事會の文書に曰く、

「現下の饑饉が餓死者、乞食を生めることは未だ嘗て他に其の類を求め得ぬ。嘗て豊穰だつたブルネー縣では住民の三分の一以上の餓死者を生じたが、他の地の慘狀も略々同様である。」

一七七二年ワレン・ヘスチングスは理事會に次のやうな書翰を送つてゐる。曰く、

「該州の人民は少くも三分ノ一が餓死し、從つて收穫の減少を來せるに拘らず、一七七一年の歳入は一七六八年のそれを凌ぎたり。慘狀前述の如くなるに對應し、歳入の減少を豫想されしに拘らず、然らざりし所以は前年度の標準を萬難を排し強行せる爲なり。」

印度王國の徴税吏が一七六四年—一七六五年に集め得た金は八一八、〇〇〇磅であつたが、一七六五—一七六六年東印度會社の支配下に於ける收入額は一、四七〇、〇〇〇磅となり、一七九〇—一七九一年には二、六八〇、〇〇〇磅となつた。また會社の收入に歸する地租は一八一二—一八一三年四百九十萬磅より、一八二二—一八二三年千三百六十萬磅、更に所謂印度兵亂（實は印度人の排英革命）の起つた一八五七年度には千五百七十萬磅に増加したのである。尤も右増加は新地域の征服、耕作面積の増加にも依るものである。會社にとつて地租以外の財源として鹽及び海關稅收入があつた。所謂大兵亂當時會社の總收入に對する地租收入の割合は三分の二で、鹽及び海關稅收入が夫々四分の一程であつた。然も其の後會社の收入は著しく増加し、會社の統治始つて以來六年間の歳出入報告書に依れば一七六五—一七六六年の總收入二、二六〇、〇〇〇磅が翌年度三、八〇〇、〇〇〇磅となつたが、是より徴稅費、會社の軍事的行政的事務費を差引き猶一、二五〇、

〇〇〇磅の餘剰を來したのであつて、是は總て英本國に送金せられたのである。一七六五—一七七一年に至る歳出入は次の通りである。

總收入	二〇、一三三、五七九磅
純收入	一三、〇六六、七六一"
經費	九、〇二七、六〇九"
剩餘	四、〇三七、一五七"

然し右の如き純収入の三分ノ一に達する剩餘だけがベンゴール經濟資源の搾取でなかつた。英國の役人は印度商人を正當な職業から驅逐し、莫大な産をつくるに至つたからである。ベンゴール富源の搾取に就いてはベンゴール知事ベレルスト(一七六七—一七七〇年)が編纂した一七六六—一七六八年間のベンゴール輸出入統計に依つても知ることが出来る。

輸入總額 六二四、三七五磅

輸出總額 五、三二一、二五〇磅

儲かつた金は英本國に送られ、英國は是を以て印度の産物を購入し、是を輸出販賣して更に一層の儲けを得た。斯くて一七九五—一八一一年迄の間の會社の投資は一、三三二、八七七磅と計上せられるに至つた。

會社がベンゴール、ビハル、オリッサから非常な儲けを得たことは、更に他の地域を獲得する野心を起さしめた。而して一七六一年ボンデイシエリーに於て佛蘭西が敗退せる後英國の領土併合は着々進行し、それは一八五七年の大兵亂迄繼續した。此間マイソール、カーナチック、タンピヨール、ラジプタナ、下ビルマ、パンジャブ、シンド、ウードが併合され、又は英國の保護下に置かれることゝなつた。而して是等は賄賂または謀計を以ては遂行し得られなかつたので、幾多の血腥き事件の發生を見るに至つた。即ちマールアッタに於ては三回、マイソールに於ては二回の戦争があつた外、シック、グルカ、ビンダリ、アフガン人との間に夫々戦争が行はれた。斯かる代々總督の併合政策はダルシー卿(一八四八—一八五六年の總督)時代其極に達し、同總督は、印度

王侯が養子をなす権利を奪ひ、實子なき地方王侯より其領土を奪ふの舉に出たのであつて、斯くて一八一四年時代の英國領有面積四八〇、〇〇〇平方哩は一八五六年九八七、〇〇〇平方哩に達し、其結果從來英國に友好的であつた地方王侯も一齊に英國の敵となるに至つた。

五

此間東印度會社の地位は大なる變化を遂げ、印度に於ける英國の經濟政策も亦大いに變化するに至つた。英國の貿易商人はかねて會社の利潤大なることを嫉視してゐたが、當時漸く勢力を得つつあつた英國工業者階級は、印度問題に關し議會に於て大なる發言權を得ることに成功し、其結果一七六八年—八四年迄會社は年々英國大藏省に巨額の納付金を支出せる他、英國の特定物貨を印度へ輸出せしめられ、且つ遂には其領土を英國皇帝任命の監督局の管下に置かれることとなつたのである。

過去二世紀間英國に積出された富は、大規模の資本主義工業を發達せしむる基礎となり、資本

家達は英國議會に於て勢力を得るに至ると共に、印度開發に拍車をかけ始めた。斯くてダット氏の言へる如く、

「英國の機械工業の侵入は印度の家内の工業を破壊すると共に印度は英國製品の大なる市場となり、又資源の供給地となつたが、それは印度の經濟的發達を犠牲とし英國資本主義を躍進的發達に驅りたてた。斯くて印度統治の形式に變化を生ずるに至つたのである。即ち印度開發の利益は英國資本家の獨占するところとなつたから、英國資本主義の代行機關が印度統治を執掌することゝなつたのである。」

既に一七〇九年英國議會は棉及び絹の輸入が英國製造業者に不利なりとし、印度人が絹又はキヤラコを着し、又は是を織ることを禁ずる法令を通過せしめた。また十八世紀中を通じ印度の工業家は英國に於ける市場を奪はれ、その製品は大陸方面へ再輸出される場合に限り英國に輸出せられたのである。他方に於て英國の綿業家は印度の資源を搾取すると共に其製品を印度に賣付けるに至つたのであつて、十九世紀迄に印度には多數の英國綿業家が入り込むに至つたのである。

英國は斯くて印度の資源を英國の資本を以て開發するに至つたが、此發展期に於ては幾多流血の慘事が見られたのである。是より先印度の社會機構が逐次壞滅せしめられ、英國の工業家、金融家に對する不満は漸次破裂點に達しつゝあつた。一八五七年の印度兵亂と稱せらるゝものは決して單なる傭兵の兵亂ではなく、英國の併合政策、東印度會社職員に依る壓迫的土地制度及び印度手工業の壞滅に基く印度人の反抗的革命であつた。

六

印度「兵亂」はメーラットの印度兵の反亂に始まり、それは臈てベンゴール軍隊に波及したが英國にとつて何よりの脅威は、それが人民の不満の最も激しき地方に起つたことであつた。臈て反亂の報は全國に傳はり、それと共に各所に反亂行爲を見るに至り、一時は英國の支配は中絶するかに見えた程であつた。

土地を奪はれ、所得を略された王侯豪族は奪はれた特權財産の恢復を願ひ、重税と凡ゆる誅求

に苦める農民は其窮狀を懇へ、手工業者は外貨の競争よりの保護を要求し、甘蔗及び藍栽培地の労働者は直接に外國資本家の搾取に苦んでゐた。而して是等すべてのものが今や團結し、英國に挑戦するに至つたのである。

當時英國にとつて最も危険なりし區域は、アグラ、ウード、ノース・ウエスト・フロンチア州を含むカルカッタよりメーラットに亘る地域であつた。是等地域は總べて反亂を起し、都市の小市民並に労働者が是に参加し、カウンポール、ラクノ、デイリーに於ては猛烈なる市街戦が行はれた。地方有力者が反亂を指揮し、農民が之に呼應した。ベンゴール、ビハル、オリッサに於ては農民及び栽培園労働者が反亂を起したが適當な指導者を缺いた爲、遂にゲリラ戦に出でざるを得なくなつた。

パンジャブ州に於ては農民の抗争激烈を極めたが、英國政府は同州が國境に位置を占むる重要な地域たるに鑑み、地租を比較的安くしたので、同州は遂に英國側に加擔するに至つた。斯くて印度大兵亂は遂に失敗に歸したのである。その結果、老幼男女に對し言語に絶する暴虐が行は

れた。反亂中に於ても、老幼男女は村と共に焼かれ、差別なく射撃が行はれたが、やがて軍法會議が開かれ、老いたるも若きも一齊に絞殺に處せられた。斯くて三ヶ月間に六千名が絞殺の刑に處せられたのである。

一八五七—八八年事件は、東印度會社が印度を領有することの不當なるを教へ、此處に強力なる中央政府が作られることになつた。また印度の如き大國が、交通通信機關の整備なくして統治し得ざることに鑑み、従つて此處に大資本を投じて、鐵道、道路、電信を設備することが大部隊の守備隊を常駐せしむるより經濟的なることが判つた。斯くて英國は是を機とし、反動的王侯、地主と結托するに至つた。東印度會社は株式に對する配當のみを受け、政府の監督局は廢され、その代り英國議會が印度事務大臣を通じ、印度總督及び在印度英國人官吏を監督することゝなつた。重工業の發達に伴ふ英國資本主義の要求は、大兵亂を機とし、印度投下資本を増加せしめ、印度資源の獨占を強化し、新しき帝國主義時代を樹立するに至つたのである。

第八章 印度國民運動史

一

印度國民運動は最初中流階級の運動であつた。是より先英國資本主義の印度の原料獲得並びに販路開拓の活動が強化せらるゝにつれ英國は印度に一種中間階級をつくる必要に迫られた。即ち一八二〇年代英國が印度に近代教育設備を実施するに至つたのは、英國政府並びに商社がその手足として使用する書記其他の使用人を必要としたからである。然るに爾後印度中流階級の發達を來すに至り、醫師、教育家、辯護士は概ね印度人に依つて占めらるゝに至り、彼等はまた次第に富を蓄積するに至つた。而して彼等は仲買人と共にその富を最初は土地に、次いで企業に投資するに至り、十九世紀末には彼等の中から堂々たる商賈を出すに至つた。斯くて一八八〇年頃印度

人資本が黄麻及び棉の栽培地、銀行、各種株式會社に投資せられたのである。

二十世紀になると印度資本家は工業の範域に於ても其立場を固め始めた。また一九〇五年以後棉及び黄麻資本に對する印度人投資の率が著るしく増加し始め、一九一〇年には印度人投資の銀行も十六行に増加するに至つた。また是より先一九〇七年には印度人資本一、五四五、〇〇〇磅を以てタタ鐵鋼所が創立せられたのである。

然るに英國は新興印度産業に對し重税を課し、鐵道其他交通企業を獨占し、更に一般印度資本家を壓迫する政策に出でた爲茲に印度中流階級は政治的闘争に出づるに至つたのである。その結果一八八五年富裕なる法曹ベネルジに依り印度國民會議の創立を見ることゝなつたのである。

他方政府と裕福地主階級との地代に關する利害衝突が一九〇五年ベンゴール分割問題を發端として口火を切らるゝに至つた。然も一九〇五年に至るや印度地主階級は新興企業家と對英問題に就き提携し、英國資本の獨占到對し一戰を辭せざる力を蓄へ來つたので、第二十五期國民會議はベンゴール分割案排撃の手段として英貨ボイコットを決議するに至つた。即ち地主、商人、法曹

界、知識階級が打つて一丸となり英資本主義に對抗し經濟的武器を振ふことゝなつたのである。

是に對し政府は彈壓を以て反對を粉碎せんとしたが國民主義者は飽く迄消極的抵抗をつゞけ一九〇七年に至つた。然るに國民運動の大立物ラジパトライが追放せられ、爾後國民主義者の逮捕投獄相踵ぐに及び、運動陣營に分裂を來し、急進派は武力を以て英國の支配を覆滅せんとするに至つた。斯くて是等急進主義者は秘密結社を組織し、暗殺、爆彈投擲等を敢行するに至つた。

斯くて一九〇九年に至り、政府は彈壓の效なきを知り、印度上中流階級に若干の參政權を認むるモレー・ミントー改革法を立案し、一九一一年に至りベンゴール分割案を撤回するに至つたのである。

然し英國の斯かる讓歩は何等の效なく、それ迄に行はれて來た英國の彈壓は印度人の反英心を益々募らせ、一方暗殺行爲も依然として跡を絶たなかつた。是より先英國の搾取強化による大衆の窮乏、多數學校卒業生が何等の職業にありつけないことは印度の社會的不安を益々増大しつゝあつたが、パンジャブ政府の行へる農業立法が同州農民の利益を著るしく無視せるものであつた

爲、農民出身子弟より成る同州聯隊に於ても不穩の兆が現はれつゝあつた。斯くて一九二二年には總督に對する爆彈投擲事件（其犯人は、莫大な賞金が提出されたに拘はらず、今以て逮捕されないが、急進主義派の首領であることは確實である。）シンガポール駐屯印度人聯隊の叛亂、パンヂャブ州の騷擾等相次いで發生するに至つた、而して是等急進的政治運動は有識階級のものによつて行はれたのであつて、彼等は英國よりの完全獨立を主張し、それが爲に富者を襲撃して資金を奪ひ、爆彈を以て要路のものを暗殺することを目標として行動したのである。

斯かる情勢であつたから世界大戰勃發するや、英國は何等かのゼスチユアを行ふに非ざれば極めて危険なる立場に逢着した。茲に於て英國は（イ）印度人にして大戰中英國を支持するならば、印度に自治を與ふることを約する（ロ）一九一六年より綿製品に三分半の輸入税を課することゝしたのである。而して此中（ロ）は印度人資本家にとり大なる利益を與へたのであるが、それは當時印度市場に現はれ始めた日本品を驅逐せんが爲英國の發案せるものであつた。その結果多額の印度人資本が綿糸布工業に投下せらるゝに至り、大戰前印度國產綿布が四二%なりしに對し一九一

七年には九四・六%となるに至つたのである。

一一

第一次世界大戰は印度資本家に對し新しき時代を齎した。英國は印度産業壓迫の政策を一時緩和せざるを得なくなつた。斯くて英國資本の競争が中止されると共に印度資本活動の地域が開閉されるに至つたが、英國の政策は國民を分裂せしむるに完全に成功を收め、爾後資本家の政治運動は中止され、彼等は英國政府の戦争行爲を援助し、或は急進主義者の説伏に努めたのである。同時に此の機會に印度資本家は著しい發展をなし、戦後政府は是を無視することを得なかつた。約束により賦與された自治らしいものは一九一九年のモンタギユ・チエルムスフォード改革法であつたが、それは政治的にも經濟的にも僅かの讓歩しか示さなかつた。然し同案は政治的に財産ある印度人の參政權を擴張し、總督府行政參事會に於ける印度人の數及び權限を増加し、また市政に就いては相當の權限を讓歩したのである。

モンタギユ・チエルクスフォード報告は「責任政治」實行の爲には先づ州自治より始むべきであるとしたが、完全なる州自治を即時實行する時は破綻を避け得ざるべしとの理由に依りダイアキー制を布き、政務を委譲事項と留保事項とに分割し、前者のみ英人官吏の手より分割し、印度人の大臣に執掌せしむることとなつたのである。

而して留保事項の中には財政、地租、行政、灌漑、司法、行刑、出版取締、工場検査、労働爭議調停、産業保険、住宅等が屬し、委譲事項には地方自治、保健、教育等が含まれてゐた。即ち委譲事項は議會に對し責任を執る大臣の管掌下に置かれたが、財政權が英國官僚の手中にある限り、自治賦與は實際名目的のものに過ぎなかつた。茲に印度人は斯かる改革に當然満足しきれず、國民會議の運動は却つて熾烈化するに至つた。

斯くて一九一九年より一九二二年に亘り國民運動は大衆運動の形に於て行はれた。數百萬の民衆が示威運動或は罷業に参加し、英印官吏は暫し何事もなすことが出来なかつた。是に對し英國政府は一方に於て大衆運動を彈壓すると共に他方に於て富裕印度人と和解するの方策を執つた。

即ち前者を代表するものはローラット法案であり、後者を代表するものはモンタギユ・チエルクスフォード改革法であつた。ローラット法は總督に對し何等令狀なくして逮捕又は家宅搜索をなすの命令を發し、又何等審理を経ずして秘密處刑をなさしむる權限を與へたものであつた。而して本法の有効期間は三ケ年とせられたが、是に對し全印度人が擧つて反對し、ガンデイは本法發布後大衆運動を指揮するに至つたものであつた。即ち彼は南阿に於ける印度人移民の間に於て得た經驗に依りサチアグラハ運動を開始したが、その運動は何等武器を有せぬ農民労働者に意想外に歓迎せられ、彼が全國的罷業を主唱するや數萬の紡績職工、鐵道従業員、鑛夫がこの叫びに應じて起つたのである。

大衆運動に恐れをなした英印官吏はその彈壓にあたり、各地に於て武力に訴ふるに至つた。其中最も顯著なる例はパンジャブ州アムリッサル市に於て行はれた大虐殺事件であつた。即ち一九一九年四月十三日アムリッサル市に於て平穩裡に會合をなせる一萬二千の群衆に向つて發砲されたのである。

本事件は爾後八ヶ月間極秘に附されてゐたが、遂にそれからそれへと知れ亙り世界の非難を招くに至つたのである。斯くて政府は本事件調査の爲ハンター委員会といふ調査委員会を任命し、同委員会の調査報告に依り、真相を隠蔽せんと努めたのであるが、事實は隠し蔽ふべくもなかつた。即ち本事件に於いてダイア少將は約五千の群衆に對し、彈丸の盡きる迄發砲を命じた結果、實包千六百五十發が發射せられ、約五百名の即死者と千五百名の負傷者を出したことが明るみに出されたのである。

ハンター委員会はアムリツサル以外のパンジャブ州に於いて行はれた虐殺事件に就いても報告してゐる。即ち(一)アーメダバードに於いて即死せる印度人二十八名、負傷者二十五名、(二)ラホールに於いては六千名の群衆に對し發砲せらる、(三)村落に對し裝甲列車より機銃を撃ち込みたる件、(四)飛行機より機銃掃射または爆撃をなせる件、(五)カスル高等學校を爆撃せる件等である。而して、ダイア將軍が或る地域を通行する印度人に對して匍匐を命令したことは、英人自身からも非難され、將軍は歸國を命ぜられたのであるが、印度人が是等事件の責任者と見てゐた

チエルムスフォード總督及びパンジャブ州副知事オドワイア將軍は却つて賞讃され、何等の譴責すら蒙らなかつたのである。

一九二一年印度の不穩な形勢を鎮撫すべくレ、タイング總督が着任した當時、國民會議指導下の對英非協力運動は將に昂潮時にあつた。國民會議は既に百萬磅の基金をあつめ、黨員千萬人を擁し、有識階級のみならず、農民、勞働者等全國民に對するプロパガンダを行ひつゝあつた。然るに政府に於いてガンデイに對し商議の爲招待を發するや、彼は是に應じ、讓歩をなすに至つたので、英國政府は非協力運動恐るゝに足らずとし、運動首腦者七名を逮捕し、國民主義新聞を停止處分に附したのである。

然しガンデイの讓歩に拘らず、運動は政府の意に反して深刻化し、首腦部を失つたことに依つてこれ迄下底に潜んでゐた不満が却つて表面に現れるに至つた。即ち強烈な反英感情は一九二一年プリンス・オブ・ウェールズ殿下渡印を機として爆發した。是より先國民會議は、非軍事不服従運動、地代不拂、税金不納、プリンス・オブ・ウェールズ殿下ポイコットをスローガンとして掲

げ、都鄙を問はず非軍事不服従運動、ボイコット、罷業の発生を見るに至つたが、殿下のボンベイ上陸を合圖に各地に擾亂、大工場のストライキが起り、四日間は都市の活動は全く停止したのであつた。而して殿下上陸當日ボンベイに於ては八十三名の警官が負傷し、五十三名の印度人が射殺せられ、二百九十八名が負傷し、三百四十一名が逮捕せられ、電車百六十臺が破損せしめられ、百三十三店が焼かれたのである。またカルカッタに於ても當日は全市民が一齊に休業し、國民會議選拔隊が治安にあたり、警官は如何ともすることが出来なかつたのである。夜になると電線は切られ、全くの暗黒状態を呈した。而して他の町でも同様のことが行はれた。英國官憲は装甲自動車、機關銃、兵士を動員して殿下の安全を期することは出来たが、民衆をして歓迎せしめることは出来なかつた。カルカッタに於ては五百名の逮捕者を出し、國民會議選拔隊の組織は非合法也と宣言せらるゝに至つた。一ヶ所に三名以上の集合を禁ずる法令が主要都市に發布され、州國民會議委員會の會合は非合法とせられるに至り、各地に於て多數のものが逮捕せらるゝに至つた。ガンディを除く國民會議の領袖、即ち議長C・R・ダス以下、モチラル・ネール、ラジパト・ライ等も

逮捕せられ、國民會議選拔隊に加入せる學生、労働者等また夥しく逮捕せられ、また始めて有識階級の一女性が逮捕せらるゝに至つた。

三

斯かる事態にある秋、ガンディ司會の下に一九二一年度國民會議が開催され、六千名の代議員出席の上(イ)スワラヂ(自治)の達成、(ロ)積極的非軍事不服従運動、(ハ)非暴力運動、(ニ)禁令を犯し各地に集會を開くこと、(ホ)全印度人が國民會議選拔隊に加入すること等を決議した。而してガンディには獨裁權が賦與せられたのであるが、彼は大衆的非軍事不服従運動を行ふことを躊躇した。その中政府の苛酷なる彈壓は穩和派の抗議をすら發生せしむるに至つたが、政府はマラビアの提言に基き圓卓會議を開催することを仄かし、危機を切抜けんとした。ガンディは茲に於て非軍事不服従運動を一時中止し、一九二二年一月十五日圓卓會議開催の條件を審議する爲、各派聯合會議を開くことになつた。然るにレッドイング卿はガンディの弱點を利用し、會議を不得要領

のものに終らしむるに至つた。斯くてガンデイは已むを得ず一九二二年二月七日非軍事不服従運動開始を指令するに至つたのである。

大衆的非軍事不服従運動はガンデイの好まぬ處であつたが、農民は各地方國民會議委員會の承認を得、納税拒否、其他不服従運動を着々實行し始めつゝあつた。納税拒否、外國店ボイコット等を含む非軍事不服従運動は當然に警官軍隊との衝突を惹起し、各地に於て擾亂の發生を見るに至つた。斯くてベンゴールのみで五千名が逮捕せられ、パンジャブに於ては、警察が民衆に包圍せられ、軍隊の力に依り辛うじて脱せしむることが出来たのであつた。納税を拒否せる地域には軍隊が差向けられ、強制的に是を徵集し、此軍隊駐屯費として特別税が負課せられた。また右の如き事態に關し、シク教徒出身の聯隊が政府の命令を拒否せるに至つた爲多數の兵士が放逐せられた事件が発生した。

然るに偶々二月四日U・P州チャウリ・チャウラに於て國民會議選抜隊が駐在所を襲ひ、警官數名を殺害した事件が起つた。ガンデイは是を以て大衆的非軍事不服従運動が餘り急速に行はれた

ことに對する神の警戒であるとし、彼の主唱に依りバルドリに國民會議實行委員會を開催、凡ゆる非軍事不服従運動を中止することに決定し、農民に對しては地租地代等を支拂ふ様に指令が下された。斯くてガンデイ自ら運動を混亂に陥れると共に、多數の部下をして徒らに政府の酷遇に甘んぜしめることゝなつたのである。斯くして一九二二年迄に一萬五千名の印度人が煽動、其他種々の名目で牢獄に繋がるに至つた。茲にガンデイは著しく國民の信を失するに至つたが、一方國民會議に於てはバルドリ會議の決定を再審議することゝなり、激論の末、個人的非軍事不服従運動を含む非協同運動を再開することゝなつたのである。茲に於てガンデイは逮捕せられ、六年の刑に處せらるゝに至つた。若し當時より二ヶ月前にガンデイが捕縛せられたならば、國民は舉つて蹶起し、豫測し難き結果を生んだであらうが、今や大衆的運動は破壊せられ、政府はガンデイに就き何等恐るべきものなしと考へたので逮捕の舉に出たのであるが、斯く破壊せられた大衆運動が復興するに爾後數年の歲月を要したのである。

斯くて一九二三年九月頃國民會議の戰鬪的分子は後退せざるを得なくなり、自治領制を目的と

するスワラジ黨が國民會議を指導するに至つた。

やがて國民會議の中堅層は、次第にスワラジ黨の指導者を不満とし、國民會議はその戦術を變更せざるを得ざるに至つた。斯くて一九二七年マドラスの大會に於ては、國民會議の目標を印度の完全獨立とし、國民會議の保守派を驚かすに至つた。また同會議に於ては英帝國主義戦争反對を決議したが、要するに同會議は自治領制を是とし、完全獨立を尙早とする國民會議スワラジ黨に反對せる意味に於て、劃期的意義を有した。

次いで一九二七年十一月、一九一九年の印度統治法に基き、統治機構の運営調査の目的のため、サイモン・コムミッションが任命せられたが、それは印度に於て全面的ポイコットに直面した。全國の立法議會までが何等協力するところが無かつたのであつて、一九二八年九月までに僅かにC・P州の議會が之に協力したが、全國民は斷乎として之に反對し、示威運動や總罷業が至る所に行はれ、ボンベイ、マドラス、カルカッタその他の都市では、情勢不穩のため武装警官、軍隊、装甲自動車が出動するの已むなきに至つた。調査團は至る所で反對されたが、その中に英國労働黨の

代表アトリー及びハートション兩名があつたことは特に非難された。

是より先、パークンヘッド卿は、印度國民が徒らに調査團を批難し、自らは憲法案を示さざることを責めたが、是に對し、一九二九年二月、所謂印度政黨各派懇談會が行はれ、次いで八月に至りモチラル・ネイル、バハドル・サプル、ジャワハルラル・ネイルその他五名によつて署名された所謂ネイル報告が發表された。同報告は、印度の政體は自治領制たるべく、政府は議會に對し責任を負ふべき旨を骨子としたものであつた。

斯かる情勢に對し、一九二八年急進派は、スバシュ・ボースの指導の下に印度獨立聯盟を組織し、政治的には印度完全獨立、經濟的には重要産業の國有化、經濟的平等案、一日八時間労働制度を主張したが、是にはジャワハルラル・ネイル他ネイル報告の賛成者の中からも支持者を生じた。

四

一九二八年カルカッタ國民會議に於てガンデイは完全獨立を主張するものと自治領制を主張するものを妥協せしめんと努力し、其結果ネイル報告に指示せられたる如き自治領制が十二ヶ月内に賦與せらるべきことを要求し、一方獨立論者には國民會議の名に於て活動するを承認したのであつた。即ち此決議は一年内に自治領制が賦與せられぬ時は非軍事不服從運動を復活すべきことを示したものであつた。而して自治領制を非とし、獨立を主張する修正案は激論沸騰の後一三五〇票對九七三票を以て否決せられた。

大衆の非軍事不服從運動に於ける犠牲的行爲は英國政府のみならず印度國民主義者をも驚歎せしむるものがあり、斯くて一九二九年頃より兩者の間に妥協の機運が動きつゝあつた。即ち成法委員會及び印度中央委員會の事業完了後圓卓會議を開催する件に關し一九二九年十月ジョン・サイモン卿、ラムゼイ・マクドナルドの間に書翰の往復あつて後、時の總督アーウィン卿はステートメントを發し、一九一七年の宣言にある『印度の憲法的發展の當然の歸結は自治領制の達成にある』旨を發表した。次いで十一月デイリーに開催せられた印度政界の各派を網羅せる懇談會に

於て圓卓會議は(イ)其目的を印度自治領憲法の作製に置くこと、(ロ)可及的速かに開催する事、(ハ)政治犯、國民會議領袖の大赦を行ふ限りに於てのみ、是に協力すべき態度を明らかにしたのであつた。然るに總督のステートメントは英本國に於て大論難を捲き起し、是に對しマクドナルド首相は右は政策の變更に非ず、また自治領制の實施を促進せんとするものにも非ざる旨陳辯し、且つ大赦の要求に對するウエッチウッドベン印度相の答辯は事實に反する旨を力説した。

アーウィン卿のステートメントは大衆的反亂の趨勢を抑止し、以て國民會議指導者をして時局を收拾せしむる餘地を與へんとしたものであつたが、卿の計畫は英本國保守黨の反對の爲遂に水泡に歸した。隨つて國民會議領袖は一九三〇年ラホール會議目指して參集する數千の革命主義的國民を如何ともすることが出來ず、其結果ラホール會議は、圓卓會議ボイコット、完全獨立の要求、納稅拒否其他非軍事不服從運動の實施を決議するに至つたのであつた。

總て政府の鹽專賣制に公然違反する目的を以てガンデイのダンデイ海岸に於ける製鹽が開始せられた。また外國産綿布及び酒類のボイコットが特にボンベイに於て效果的に行はれ、各店舗の前

には夫々監視隊が頑張つた。獨立旗の掲揚には數萬の群衆が参加し、其結果警官の毆打及び發砲を受けた。地代、税金、借金の不納運動も、當然收稅吏及び警官に對する底力ある抵抗を展開するに至つた。一九三〇年四月ベンゴール州チッタゴングの兵器廠襲撃事件が発生し、五月八日にはボンベイを去る二百哩南東のシラプルに暴動が勃發した。即ち工業都市であるシラプルの労働者は罷業を行ひ、革命的スローガンの下に示威運動を開始するに至つた爲警官の發砲するところとなり、即死二十五名、負傷者百名を出すに至つた。然るに人民側は警察官署及び酒店を全部焼拂ひ、また裁判所其他の官廳にも放火し、同市の政權は數日間人民側の手中にあつたのである。總て英國軍隊が増派され、五月十三日には戒嚴令が布かれ、言語に絶する大彈壓が行はれたのであつた。ストライキはボンベイ、アーメダバード、デリーの各紡績工場、ラングーンの船渠にも起り、またカルカッタ、カラチにも騷擾の勃發を見たのであつた。

然し最も革命的な擾亂は、四月中旬、ノース・ウエスト・フロンチア州の首都ベシアワールに勃發したものであつた。軍隊は直ちに差向けられたが、装甲自動車は却つて焼打されるの破目に

陥り、軍隊は直ちに射撃に移り、即死六十六名、負傷者百五十名を出したのであつた。然るに本事件中最も注目すべきは、射撃の命を受けた軍隊中印度人聯隊第十八ライフル隊が回教徒群衆に對し發砲するのを拒否したことであつた。即ち彼等は群衆に同情し、若干のものは其銃を群衆に手渡したのである。斯くて軍隊は撤退せざるを得ざるに至り、同市は二週間に亘り人民側の手中に歸したのであつた。然し結局同市に對して空爆が行はれ、大部隊の英國軍増援に依つて是を占據することが出來た。而して前記聯隊の兵士中十八名は軍法會議に附され、夫々重刑を宣告せられたのであつた。

右のノース・ウエスト・フロンチア州の險惡なる情勢に就き一九三〇—三一年の印度政府報告は左の如く記してゐる。

「英國の勢力が該地方に及んで以來、今日迄斯くの如き悪化せる情勢は未だ嘗て無かりし處である。」

丁度ベシアワールに反亂勃發中國境地方の豪族トラングサイは麾下の農民軍を率ゐ、ベシアワール

を去る二十哩の地點に迫つて居り、附近一帯のアフリヂ族其他の種族も是に呼應せんとしたが、英國空軍數次の爆撃に依り漸く事態を緩和し得たのであつた。臆てガンデイの非暴力主義を奉ずる回教徒農民團體赤シャツ黨は黨員七百名から一擧に二萬五千に増加し、政府の彈壓に對し非暴力運動を以て對抗するに至つた。斯くてノース・ウエスト・フロンチア州に於ては赤シャツ黨及びトラングサイ農民隊の反亂鎮壓の爲、英國空軍は數千噸の爆彈を投下しなければならなかつた。赤シャツ黨は青年聯盟と密接な關係を持つてゐたが、青年聯盟同様政府は是を非合法團體とし、其指導者を逮捕するに至つた。然し部下黨員は屈することなく、ゲリラ戰に趨へ、廣く農民間に其のスローガンを宣傳したのであつた。

大衆運動に對しては言語に絶する苛酷なる彈壓手段が用ひられた。軍隊、飛行機、戦車、大砲彈藥が各地に送られ、反亂を鎮壓する爲には英國軍隊の凡ゆる武力が用ひられたのである。六月始めには五百噸の爆彈がノース・ウエスト・フロンチア州に投下せられ、八月末迄に逮捕せられたものはガンデイ、ネールを始め二萬乃至二萬五千を算した。斯くて政治犯人を收容する爲、刑宣

告前の非政治犯人が續々釋放せられたが、猶且つ是を收容し切れず、多數のものが鐵條網を張つた空地に追ひ込まれたのであつて、年末迄に逮捕投獄せられたるものは實に五萬四千の多數に上つたのである。

次いで政府は諸種の條令を發布又は適用し始めた。即ち七月迄に新聞條令に依り、國民主義新聞六十七社其他五十五社が閉鎖を命ぜられた。是より先五月三十日總督は二つの新條令を發布したが、其一つは地代乃至税金不納者を裁判を経ず六ヶ月の懲役に處し、または罰金に處するものであり、今一つは印度人官吏のボイコット及びビケチングを防止するものであつた。然も興味あることは、印度政府の斯くの如き措置に對し、英國労働黨政府及び其の印度相ウエッヂウッド、ベンが滿腔の支持を與へたのみならず、英國保守黨の面々迄が絶讃を送つたのであつた。

五

サイモン・コムミッションの報告が發表せられたのは正に斯くの如き時に於てであつた。同報告

の勸奨事項を記載した第二卷は一九三〇年六月二十四日發表せられたが、それには總督が屢次聲明した「印度に遠き將來に於いて自治領制を賦與する」件に就いては一言も觸れられてゐなかつたのである。即ちサイモン・コムミッションの勸奨事項は一方に於いて各州に若干の讓歩をなすと共に中央集權を強化せんとするものであつた。即ち各州に於いては立法議會に對し責任を執る印度人大臣があるが、これは英人の知事に依つて任命せられ、然も知事は大臣の意志を無視し得るのである。また議會の權限は擴張せられたが、其の投票は大臣を拘束する力を有せず、選舉權も擴大せられたが、所謂コムミュナル・アウオドの制は依然存置、否寧ろ擴大せられた。而して英國の統治に最も緊要なるもの（國防、財政、司法等）に就いては中央集權化を勸奨した。また從來直接選舉に依つてゐた立法議會は聯邦議會を以て代へることとし、其の議員は各州及び王侯國より選舉せられるものと、總督の任命する十二名の議員及び總督府參事會員を以て構成せられることとなつた。州議會選舉に就いては選舉權所有者數は人口の四%より一〇%に増加せられたが、知事には非常權なるものが賦與せられたから、其の效果は差引零であるといへる。

古くから英國統治の根本方針であつた「分割且つ支配する」政策はサイモン・コムミッションが所謂コムミュナル・アウオド即ち教派別選舉制を勸奨したことに依り一層強化せられた。また中央政府に英國の傀儡ともいふべき王侯國代表を引き入れることに依り英帝國勢力の愈々強固ならんことを期したのであつた。更にビルマを印度より分離し、且つノース・ウエスト・フロンチア州に對し自治の程度を制限すべしといふ勸奨は特殊の意義を有するものであつた。ノース・ウエスト・フロンチア州は印度と、アフガン、蘇聯との間の緩衝地帯たらしむる要ありとせられ、また人種宗教を等しくするビルマは支那と境するが是に蘇聯の勢力が侵入しつゝあるに鑑み、是を以て印度と支那との間の緩衝地帯たらしめんとせられたのであつた。然るに印度國民會議に相當し、ビルマ人の九割を代表するビルマ人協會總會は常に分離に反對して來たのであつて、サイモン・コムミッションの勸奨は明らかにビルマ人の輿論を無視するものであつたから、印度及びビルマに於いて共に反對を受けたことは當然であつた。且つ一九三二年十一月分離問題に關し行はれたビルマ總選舉に於いて反分離派が壓倒的多數を得たことも怪むに足りなかつた。

然しサイモン報告中最も注意すべきは軍隊に關する項目である。即ち同報告は將來長期間に亘り印度軍に相當多數の英國人を包含せしむることは不可避なりとし、故に印度軍の統帥は、印度總督及び印度軍司令官をして英國が直接是を行はしむべしと勸奨したのである。而して從來立法議會が軍事に對し有する権限を總べて排除し、且つ軍事豫算（一年四一、〇〇〇、〇〇〇磅）の審議權をも與ふべからずと勸奨したのであつた。斯くの如く頑迷なる政策が執られたのは國防の統帥が、外交、英帝國の交通及び貿易、並びに東洋に於ける英帝國の地位確保の爲に必要であり、また印度に内亂發生する場合も考慮せねばならぬからであるとせられた。サイモン報告は第一卷に於て印度大衆の憫むべき窮狀に就て叙述する處があつたが、第二卷の勸奨に於て是を救濟する何等の對策も述べてをらず、却つて大衆の窮狀より自動的に發生する地方的擾亂の壓伏に假借なき手段を用ひることが勸奨せられたのであつた。斯くて同報告には次の如き言が見られるのも怪しむに足りないのである。

「現下の状態に對處するには、遅ればせにならない様或種の權力を政府に與ふべきである。即ち總督または知事に對し充分の權力を賦與すべきである。

次いでサイモン報告の勸奨事項を印度上流階級の消化し得る様な憲法に仕上げる爲の圓卓會議は一九三〇年十一月倫敦に於いて開催せられた。

其のメンバーは總督府參事會員及び總督任命の王侯、地主、大資本家より構成せられてゐたが、彼等はサイモン・コムミッションの勸奨に基き印度憲法案を論議した。而して右會議中英國政府は封建的反動勢力たる王侯國代表と策動し、印度聯邦案の思想導入に努力した。蓋し元來王侯は英國の軍事的保護に依り其王位を維持して居るものであるから、英國に對し驚くべき程其要求通りに動いたといふことも怪むに足りぬのである。是を要するに王侯を參加せしめたことは英國の最も效果的な政策であつた。英國は王侯を支持することに依り單に王侯國內農民の窮乏に拍車するのみならず、革命主義運動に對する障壁たらしめ、且つは聯邦議會に於て常に英國支持派たらしめ得るからである。

斯くて作製せられた新憲法案は所謂安全保障事項及び緊急權に就きサイモン・コムミッション以

上の権力を規定するものとなつた。故に一月十六日王侯國代辯者ハクサル大佐は次の如く述べたのである。

「今や總督の緊急權及び留保權の規定に依り責任政治なるものは空洞となり獨裁政治をカムフラージュせるものが新憲法と云ふものになる。」

一九三一年一月の圓卓會議に於ては國民會議をして非軍事不服從運動を中止せしむるため、一つの妥協的方法が勸奨せられた。次で國民會議實行委員會を非合法なりとする法令が撤回され、ガンデイ以下の領袖が無條件に釋放せられた。やがてガンデイと總督との間にデリーに於いて協定が作製せられ、ガンデイは不服從運動を中止する代りに、政府は二萬三千人の被投獄政治犯人を釋放し、その他鹽の採取に就き、法規制限の緩和を行つた。然もガンデイが最初要求した警官非行調査に就ては拒絶せられ、またメーラット事件政治犯及び印度人聯隊の兵士は大赦より除外せられた。然し一九三一年三月末、カラチに開催せられた國民會議は、デリー協定を承認し、ガンデイを以て次期圓卓會議代表とすることに決定した。

一九三一年十二月ガンデイが圓卓會議を終へ歸國するや、印度の情勢は出發前と全く異り、農村の不穩は其の極に達してゐた。是より先、一九二九年末の世界經濟恐慌は農業に甚大なる影響を及ぼしつゝあつた。斯くて一九三〇年一月より印度農産物價は暴落し始め、一九三一年五月には一八七三年の水準以下に落ちたが、地租其他の農家負擔は激増しつゝあつた。斯くの如き農産物價の下落、租税、地代の増加並びにルビー貨の下落に依る負擔の激増は農民をして否應なしに團結せしめ、殊にマドラス、ベンゴールの米作地帯、ベンゴール、アッサム、オリッサの麻栽培地に於てその傾向顯著なるものがあつた。此處に國民會議領袖の指揮に依る納税拒否運動は燎原の如く擴大した。一九三〇年十二月ベラルに於ては農民が金貸及び地主に對し反抗し、價格四萬磅に對する作物及び財産を破壊し、U・P州に於ては地代不納運動が擴大し、一九三一年十二月十萬の農民が是に参加するに至つたため、政府は遂に地租を減額するに至つた。グジュラートに於ては農民が直接政府から土地を借りてゐるのであるが、數百の農民は地租の納付を拒んだため、作物、家畜は勿論土地までも沒收されるに至つた。當時、ブレルスフォードは同地方を訪

問し、銃及びラチ棒を携へた警官が村から村へと巡り、棒や銃の臺尻で誰彼の差別なく農民を毆打したと述べてゐる。また彼に依れば警官は平和的集會を解散せしむるに言語に絶する暴虐を行ひ、或は逮捕者を露天の檻の中に拘束したとのことである。

ビルマに於ては一九二八年頃より納税拒否運動が行はれたが、是また官憲の殘虐なる彈壓に依つて始めて鎮壓されたのであつた。爾後ビルマの革命運動は次第に激化し一九三〇年十二月遂に英國打倒のための大革命が勃發した。此反亂の主因は米價の嘗てなき暴落、即ち一九三〇年中に百俵百五十留比が六十五留比に下落した爲、農民が名狀すべからざる窮境に陥るに至つた事、是に同年人頭税が負課せらるゝに至つたことが人民の憤激に油を注ぐ結果を來したゝめであつて、此反亂は一九三一年末迄間歇的に行はれたのである。反政府黨はある場所に於ては二千乃至三千を算したが、彼等の所有する銃器は少く、且つ有力なる英國兵の援護を受くる軍警に圍繞せられる有様であつたから、一九三一年十月迄にビルマ人約三千が射殺されたに對し警官の死傷は百名以下であつた(政府統計による)。而して反政府黨の審判の如きも一時に數百名を取調べ有様で

全く名目的裁判に過ぎなかつた。

六

一九三一年の農村の状態は將に斯くの如くであつたが、工場労働者も農民に劣らず積極的であり殊に鐵道従業員は總罷業を計劃しつゝあつた。當時國民會議は勢力の失墜を恐れつゝあつたが、州國民會議はデリー協定の廢棄、並びに大衆的非軍事不服從運動の再開を要求しつゝあつた。而して國民會議の領袖は該運動を復興する力がなかつたが、ガンデイは大衆の熱意に押され、運動を再開することとなり、彼は印度上陸一週間に於て投獄せらるるに至つた。

大衆的運動の再開に對しては、英本國に於けるホア印度相、印度總督ウイリンドン卿が相協力して彈壓の強化に努め、一九三二年非常時特別權力條令がボンベイ、ベンゴール、U・P、パンジャブ各州に施行されたが、それは官憲に對し左の如き權力を與ふるものであつた。

(イ)嫌疑者を令狀なしに逮捕し、監禁すること

(ロ)財産を没収すること

(ハ)一定の道路または地域に近寄るを禁止する事

(ニ)特定の人物に對し一定地域に居住することを命令する事

(ホ)不穩行動者の現はれた地域に於て住民全體に罰金を課する事

本條令に依り政治犯人審理の爲の特別法廷が三ヶ所に設けられたが、其裁判は秘密に行はれ、判決は終身追放と死刑では是に對する控訴は認められなかつた。其他施行されし條令として不法煽動條令(納税拒否煽動等に對するもの)ボイコット防止條令、不法結社條令等があつた。而して不法結社條令は政府の欲せざる結社を不法とし、其基金を没収せしむるものであつて、本條令に依り國民會議も亦不法結社と宣言せられ、指導者二百名を含む、七千名が逮捕せられたのであつた。

然し斯くの如き苛酷なる彈壓も印度を鎮靜せしむることが出来なかつた、ボイコット及び非軍事不服從運動は依然繼續せられ、各地に擾亂、ストライキが勃發した。

七

一九三二年は各教派に分割選舉制を適用する所謂コムミュナル・アウオドが發表せられた。それによれば教派其他のカテゴリーに依り選舉區を十二に分割し、其結果として投票權を二重に認めらるゝものも生ずるに至つた。而してガンディが生命を賭して抗爭せんとしたに拘はらず、不可觸賤民にも單獨選舉區制が認められたのである。仍つてガンディは九月二十日より絶食闘争を行ひ、其結果として印度教徒と不可觸民間に協定(プーナ協定)成り、兩者の共同選舉區制が認めらるゝに至つた。而して爾後ガンディは不可觸賤民の寺院參詣を承認せしむることに力を拂ふに至つた。

一九三三年三月十七日所謂白書に依り英國の印度統治改革案が發表せられたが、數日後サムエル・ホア印度相は、印度將來の統治、就中白書の勸奨案を審議せしむる目的を以て英國兩院、印度王侯國、英領印度各代表を網羅せる共同審議會を開催すべき案を下院に提出した。

新憲法の目標は王侯國及び英領印度諸州を以て印度聯邦制を布かんとするに在る。而してその爲には全印度王侯國人口の半以上に當る王侯國參加が條件とされてゐるが、聯邦制施行後も總督は聯邦總督たる外、英國太守としての資格を以て聯邦外に於て王侯國を支配する事になつてゐる。加之英國王を代表する總督は軍事、外交、宗教問題に就て專行權を有し、且つ次の如き事項に對しては所謂特殊責任を認められてゐる。

(イ) 印度の治安に重大なる脅威を與ふるものを防止する事

(ロ) 財政的安定の保障

(ハ) 少數派の安全保證及び王侯國の保護

其他總督は議會を招集し解散するの權、兩院協同審議會召集の權、法案を認許または拒否するの權を有する。また非常時には條令を發布するの權利を有する。而して英領印度十一州の英人知事も亦略々總督の特權に類似せるものを認められてゐるのである。

聯邦議會は上下兩院より成り、上院議員は王侯の任命のもの百名、英領印度各州より選出せら

るゝもの百五十名、官選議員十名より成る。下院は三百七十五名より成り、中百二十五名は王侯任命のものとするが、其他は州より直接選舉せられる。然かも下院議員選舉權者は全人口の二乃至三%に過ぎぬのである。

各州立法議會の權限は擴大せられ、其選舉法、議席數は一九三二年八月四日のコムミュナル・アウオドに依り行はれることになつてゐる。其選舉資格は聯邦議員選舉の場合程嚴重でないが、それでも參政權者は英領印度全體の十四%に過ぎないのである。而して從來英人たる知事の管掌に屬してゐた治安其他所謂留保事項は立法議會に對し責任を執る印度人の州大臣に賦與せられるが、知事は「特殊責任」を有し、印度人大臣の決定如何に拘らず獨斷專行し得るのである。

斯くの如き案を以て印度自治といふは帝國主義の詭辯に外ならぬのである。即ち斯くの如き憲法が印度に實施せらるゝ時、印度は依然として英國の總督及び英國の知事、並びに王侯國を制御する英國の理事官に依り統治せらるゝことに於て過去に何等異るところはないであらう。煩雜な地方的政務を印度人官吏に委ねつゝ、重要事項は英國の手に確把し、委讓事項と雖も是が統制權

は英國知事の手中に置かんとするものが所謂新憲法の自治である。

一九三三年三月二十七日サムエル・ホア卿は下院に於て次の如く述べた。

「印度總督、知事及び高官は依然英國に依つて任命せらるゝのである。英國の擔保、中央及び州政府の英國官吏は依然英國議會に依り保護されるであらう、印度領有の基幹たる軍隊は議會の監督の下に存置せらるゝであらう。是等は決して机上の保障ではない。政府の首脳部に廣汎なる權限が與へらるゝことはこれから余の詳説せんとする處である、……知事は必要なる時其大臣の勸奨に反し有效なる命を下し得るのである。」

モルガン・ジョーンズは新憲法を評して次の如く述べてゐる。

「印度人急進主義者が聯邦首腦者たることは新憲法では全然不可能である。またベンゴール州の如きに於いては彼等が大多數を占むることも亦不可能である。

一體國民間に勢力あるものが多數派たり得ざる如きものを以て如何にして立法議會と稱するこゝとが出来るのであるか。また其立法議會に法案を提出することを政府が禁ずる様な場合それは如

何にして立法議會の名に値しよう。況んや、立法議會の決定を政府が自由に改變し得る如きに於ては、それは全く立法議會の名に對し恥づべきものといはねばならぬ。」

第九章 英帝國主義と印度産業

一

英帝國主義は英國産業と競争する如き印度工業を破壊した結果、印度は全然農業國となり、今日の印度の産物の九割迄は農産物といふ有様である。失業せる工人連は他國に於ける様に機械工業に吸収せられず、農村へ歸り、耕すに土地なき労働者の數は急速に増加したが、同時に政府の土地併吞策、地租徴收吏の誅求は愈々土地の獲得を不可能にした。

印度の貧困の眞の原因は印度が英國工業資本主義の農業植民地たることにある。即ち一八八〇年「饑饉委員會」は「農業に従事する外なき人間の數は土地耕作に必要な數以上に達してゐる」と述べたが、一八九一年―一八九二年の國勢調査は、其間工業の發達せるに拘はらず、農業人口

の増加したことを示してゐる。

年 度	農業人口率
一八九一年	六一%
一九〇一年	六六%
一九一一年	七二%
一九二一年	七三%
一九三一年	六六%

印度農民の貧困が土地そのものゝ少いことによるのでない事は左の政府統計によつて明らかである(單位百萬エーカー)。

	一九一五―一六	一九一八―一九	一九二四―二五	一九三〇―三一
英領印度土地面積	六二〇	六二五	六六八	六六九
森 林	八五	八七	八七	八八
印度は叫ぶ				一〇一

荒蕪地	144	147	151	147
未耕地	114	114	153	154
播種地	1221	201	227	229
畔地	52	73	47	50
灌漑面積	47	47	45	50

右に依り最近の播種面積は二億二千九百萬エーカーに過ぎないのに對し、可耕地にして播種せられぬもの二億エーカーに及ぶこと明らかであつて、農業労働豫備軍の多きに拘らず耕作面積が比較的少いのは土地關係が獨占形態にあることを示すものである。

次に最近三回の國勢調査に於ける農業人口構成を検すると左の如くである(單位千人)。

地 主	1911年	1921年	1931年
耕 作 者	71,096	74,665	61,180
地 主	2,845	3,727	3,257
耕 作 者	71,096	74,665	61,180

労働者(農業) 二五、八七九 二一、六七六 三一、四八〇
 其の他(園藝、牧畜、森林關係) 五、一九六 四、六〇八 六、五三六

一九一一年より一九二一年の間に於いて農業労働者の減少を見たのは、一九一八年に流行性感冒其の他の熱病が蔓延し主として貧困階級に千百萬の死者を出し、且つ食糧の缺乏を來したことに基くのである。

また前記地主の項目には農村の大地主及び収入の少い小地主のみならず、其の間に位する各種のゼミングル(地租徴收地主)收税人等農民に寄食してゐる連中を含むのであるが、一九一一年より一九二一年の間に於いて地主の項の數字が増加したのはとりもなさず、それらのもの、搾取の強化せられたことを示すのである。而して次の十年間に其の減少を見たのは恐慌の影響が地主に對し頗る大きかつたことに由るものである。

英國の印度農民に對する搾取を代表するものは地租であつて、それは州歳入の四割五分を占めてゐるのである。一八五七年當時印度政府の地租歳入は千五百九十萬磅であつたが第一次歐洲大

戦前には二千百萬磅、最近には二千五百萬磅に増加するに至つた。

農民の負擔は(イ)課税標準が實收入によらず一定の平均基準によつてゐる爲、饑饉の如き時に於てすら農民は平常の割當額を納付するを要し、(ロ)ゼミンダリ制度に依り、農民の地租の中五割五分乃至七割五分は地主の懐に入り、残りが政府收入となるのであるから、農民の負擔は愈々以て大きいわけである。而して地租の半分以上はゼミンダリ制度に依つて徴集されてゐることから考へると一九三〇—三一年の政府の地租歳入二千七百萬磅といふも、實際に農民が支出した額は四千萬乃至六千五百萬磅に達したであらうと推定せらるゝのである。

農民は地租の他に消費税に苦んで居る。即ちサイモン報告すら次の如く述べてゐるのである。

「貧しき耕作者は其土地の收入を以て地租を納めるのみならず、砂糖、石油、鹽等の消費税の負擔に苦しみ、然も他方収入は増加する一方なるに拘はらず、一世紀前から定つてゐる名目的な税金しか拂はぬ地主、ゼミンダリからも、種々な搾取を受けてゐる」

人口一人當りに對する課税額は一八九一—九二年二留比四アンナだつたものが、一九二四—二

五年には四留比二アンナに上つた。然し是は地租を含まないので地租を入れると五留比九アンナになり、更に地方税を加へると八留比になるのである。

印度人の収入は、金持階級を勘定に入れ且つ饑饉の年を考慮外において、一人平均三十留比(約二磅)である。

二

ウイリアム・デイグビーは英國に於て死亡率が減少し、印度に於て是が増加しつゝあることを指摘し、一九〇〇年英本國の死亡率百に對し、印度の死亡率二百十七なることを擧げ、其理由として印度人が充分食物を攝り得ないことを擧げてゐる、彼はまたヘアの「印度に於ける饑饉」に序して「一八五七年より一九〇一年の間に饑饉又は饑饉による病氣の爲約四千萬人が死亡した」と述べてゐる。

十九世紀中饑饉が増加し、饑饉による死亡率の増加は顯著なるものがあつた。即ち一八〇〇年

一八一五年迄の饑饉回数五回、死亡者百萬、一八二六年—一八五〇年の饑饉回数二回死亡者五十萬、一八五一年—一八七五年饑饉回数六回死亡者五百萬、一八七六年—一九〇〇年饑饉回数十八回死亡者二千六百萬であつた。

一八九八年の印度饑饉委員會報告に依れば一八九七年の饑饉の影響を蒙つた地は十三州に及んだが其實決して食糧は缺乏してゐなかつたと言ふことである。即ち早拔はあるにはあつたが平年から全人口を支へるだけの食糧の餘剰はあつたのである。然るに早拔と共に食糧の価格は鰻上りに騰貴し、人民は是を購入し得なくなつたのである。而してそれが英國の失政によるものである事は明らかである。即ち第一に農民に重税を課し、第二に手工業を破壊し、印度工業を疲弊せしめ、第三には帝國主義戦争を起し、印度の國債を増加し、第四に銀の低評價に依り、印度人の富を奪ひ、第五に農産物價の騰貴を招來したことに因るものであつた。

英領印度に於ては人口の六六・四%が農業を以て生活の資としてゐる。而して印度の輸出品といへば農産品に限られてゐるのである。それにも拘はらず英國政府は農業行政費の十八倍の額を

軍費に支出し、地租の十一分の一を農業費に用ひてゐるのである。

印度五十萬の農村は主として獨自の單位をなしてゐる。舗装道路は極めて少なく、鐵道は更に少なく、悪天候には用をなさぬ粗末なトラックが唯一の交通具である。従つて内國貿易乃至交換の機會は少なく、農民の生活は村落附近の土地生産力に依存するのである。然も灌漑設備が缺如してゐる爲「耕作地の五分ノ四は雨量の多少に影響を受ける」(サイモン報告第一卷)。斯くて旱魃と饑饉とは常に印度農民の生活を脅かしてゐるのである。

英領印度の二十%は森林面積であり、政府の管理するところである。而して多少價值のある材木の出る山では百姓は燃料として木を伐ることを禁ぜられ、また許されるところでも代償を拂はせられるのである。是は王侯大地主の獨占保有する獵區に就いても同様である。一方農村の多くには樹木がないため、木若しくは石炭を使用するには買はねばならぬのである。従つて、印度農民は已むを得ず肥料にすべき筈の牛糞を固めて燃料とする爲、自然土地の生産力は貧弱となるのである。勿論金肥の如きは決して施されないのである。

人口の増加は土地を細分する傾向を帯び、自然今日東部及び南部に於ける一人あたり所有面積は五エーカーに過ぎない。一九二八年農業委員報告に依ればボンベイ州農民の四八％は五エーカーの地面しか有せぬが、是等小農の總地面積は同州面積の二・四％に過ぎぬといふことであつた。農民は此貧弱な地面に何等科學的農耕法を行はず、然かも家族を養ふのみならず、地租、灌水利其他政府に對する地方的支出、地代等に殆んど収入の半分を支出せねばならぬのである。而して斯かる状態では到底やつてゆけぬので農民は金を借りることとなるが、其結果は益々いけなくなるのである。

一九一七年ボンベイ州農業局長マン博士はデツカン地方の模範的農村に就き耕作、收穫農地關係、負債、收入、支出等に就き詳細な調査を行つた事があつた。其結果は「豫想外に貧窮して居り」決して模範的農村でないことが判つた。仍つて博士は他の農村に就て調査したが同様の結果を示したのであつた。

博士の調査に依れば、最初の村落では條件のよい時でも八一％のものがその家族を支へ得ず、

次の村落では八五％のものが常に經濟的不安にあることを知つた。博士の調査に依れば農家の所有地は一七七一年平均四〇エーカーであつたのが一九一五年七エーカーとなつてゐることが判つた。而して農耕地の斯くの如き細分化は、人口の増加(それは歐米の増加率より少ない)によるよりも、英資本主義の壓迫によることが證明せられたのである。

農家の經濟不安の今一つの原因は地代の負擔の大なることである。博士の調査によれば農家收入の半分が地代として支出されるといふのである。また借金の利子は甲の村では元金一二、〇〇〇留比に對し二、五〇〇留比なるものがあり、乙の村では元金一四、〇〇〇留比に對し六、七〇〇留比なるものがあつた。多くの村人は其土地を金貸の擔保とし、博士の調査當時百七十二エーカーの土地、五萬留比の貸金を持つものがあつたがそれは無一文から叩き上げた金貸だつた。

三

一九二一年ボンベイ州に於ける公式調査に依れば住民の四割二分乃至五割五分迄が負債を有し

てゐたといふ事である。またパンジャブ州に於ては一八七三年より一八九三年迄の間に擔保物件数が一萬五千件より五萬件に増加し、ダーリングの調査に依れば、一九二二年現在同州の農民の負債は地租の十九倍であつた。

斯くの如くして印度各地に於ける農民は負債の爲に奴隷同様の境遇におちて行つた。而して一九三一年ホイットリー労働調査團の報告に依れば「ビハル、マドラス各州では労働者が地主より借金するには、是を返還する迄労働するといふ契約を結ばされる。然るに借金は殖える一方であるから、労働者及び其家族が一生地主の奴隷として労働する。然も斯かる奴隷は賣買せられ、また擔保にもせられるのである。而して斯かる制度に對して何等法の制裁なく、ビハル州に於て特別立法を行つた事があるが、今日猶依然として存續してゐるのである。」

一八八二年農民の中七百五十萬が土地なき日稼ぎ労働者であると測定せられたが、一九二一年其數は三千七百九十萬と調査せられた。一九二七年全印労働組合會議に於てM・ジョンは農業賃銀労働者二千五百萬、準農業賃銀労働者（僅かの耕作地を有するも不充分なる爲労働するもの）

五千萬といふ數字を擧げた。而して一九三一年には農業賃銀労働者略々三千五百四十萬と註せられてゐる。

印度農民大衆の地位は過去三十年間に著るしく悪化した。一九二二年より一九三一年迄の間に農業労働者は二千百六十萬から三千百四十萬に殖え、其賃銀は一九一四年より一九二二年にかけて物價上高に拘はらず低下を示してゐる。且つ世界農業恐慌は收穫物の價格を減ずると共に農民の負債を一層増加した。印度主要農産物たる棉、黄麻、小麥、米、茶等の値は一九二九年より下落し始め十ヶ月にして二割の低落を示すに至り、一九三二年秋には五割の下落となつたが、他方税金は増加する一方であつた。而して價格の下落と共に生産額の減少を來し、播種面積が減少するに至つた。斯くて一九三〇年より一九三一年にかけて農民は工業原料品よりも寧ろ小麥を作り、高級品よりも却つて低級品を作るに至つた。斯くて穀物は増加するに至つたが、危機の深化と共に是も不可能となり、一九三二年パンジャブ州の小麥耕作面積は一割五分減じた。また最近十年間に一エーカー小麥生産額は七百六十封度より六百封度に、米は八百七十七封度より八百三十七封度に減

じた。

播種面積 (單位千エーカー)

	米	麥	棉	黄麻
一九二九—三〇年	八〇、六二二	三二、六五四	二五、九二二	三、四一五
一九三〇—三一年	八二、七〇六	三二、一八九	二二、八二二	三、四九二
一九三一—三二年	八四、〇三四	三三、七四九	二三、五三二	一、八六一

農産物價の下落は農村負債の荷重を一層増加した。例へば印度中央銀行委員會に依ればベンジヤブ州の農村負債は一九二一年九十クローアなりしも一九二九年百三十五クローアに増加し、一九三〇年には二百七十クローアに著増した。然るに農産物價の下落に拘はらず、地租は却つて増加を示してゐるのである。例へば、一九二八—二九年(恐慌前)は二四、七五〇、〇〇〇磅であつたが、一九三〇—三一年の豫算には二七、〇〇〇、〇〇〇磅と計上せられたのである。斯してU.P州政府は、貧窮せる小作人にして地代を拂ひ得ぬものには、その權利を棄て土地を去ることを勸奨し、

其數は一九三一年に二六、八六〇件から七一、四三〇件に増加した。他方に於て都市工場に於ける失業者は從來の如く歸農し得ぬ様になり、一九三〇年より一九三三年に亘る納稅拒否運動は到底避け難きものがあつたのである。

四

斯くて農村の著るしき窮乏は工場若しくは栽培園に農民の職を求めしむるに至つたのである。印度の栽培園は三百萬エーカーに及び其使用労働者百萬を超過してゐる。其中最も規模の大なるものはアツサムにある茶栽培園であり、是に次ぐものはマドラス及びクールグのコーヒー園二十七萬八千エーカーであり、マドラス、クールグ、ビルマの護謨園は二十五萬三千エーカーに達してゐるが、其他の栽培物としてはキニーネ、胡椒、カードモム等がある。

茶及びコーヒー園はそれ／＼自社の製造工場を有するが、それは季節的に開場し、僅かの労働者しか使はないのである、栽培園は概ね森林地帯を開いたところにあり、其地域に住む土着人は

極めて少ないので遠方から労働者を徴集するのであつて、殊にアッサムに於て働く五十萬の労働者は氣候言語を異にする遠隔地から應募して來たものである。然かもアッサムはマラリアの猖蹶を以て有名であり、此處へ來るものは、歸國せざる限り、必ず是にやられることを知つてゐるのである。然るに此地の茶栽培業者は労働力の供給に躍起となり労働者募集人が募集する方法の如何を問はず、唯有利な條件を以て労働者を取次ぐブローカーに莫大な報酬を出すのである。斯くて一種の奴隸制度を發生せしむると共に、方法を選ばぬ労働者募集人を益々挑梁せしむるに至つた。而して一八六三年の労働者募集規則は募集契約に一定年限を記載すべく、此期間内に栽培地を去るものは逮捕處罰せらるゝことを規定してゐるのである。

然るに此苛酷なる制度が一般に知れ亘るや労働需要期に於て其供給の減少を來すに至つた爲一九〇一年の法令を以て労働者募集の任に服するものは官吏に限ることとし、且つ傭主の逮捕權を禁止したのである。然し期間内に労働を止める時は所罰すとの條項は一九二六年迄實施せられ、現在に於ても指紋をとつてゐる栽培地では是が行はれてゐるものと見られてゐる。是を要するに

アッサムに於ける労働者は明らかに奴隸状態にあり、傭主の承諾を得なければ他の主に就くことを得ず、また故郷へ歸る旅費を貰へないのである。

五

栽培地労働者の労働條件は統制されざる工場労働者のそれと同様である。彼等は全然法律の保護を受くることなく、労働時間は無制限であり、宿舍、衛生設備、食物、醫療等もすべて傭主のお情けによるものである。然も傭主は強力なる組織を有し、他方労働者は組織を有たぬから、勝手に賃銀率を定め得るのである。随つて賃銀は往々にして如何なる工場賃銀より低いのである。ホイットレー報告によればアッサム茶園労働者の一ヶ月平均賃銀は、連日皆勤した場合に於ても左の如くである。

男子 十五志乃至一磅
女子 十二志乃至十六志

印度は叫ぶ

兒童 八志乃至十一志

アツサム茶栽培面積の九割を代表する印度茶業者協會は地方委員會を通じ賃銀率を公定し、高賃銀を拂ふ傭主なきことを期してゐるのである。而して斯かる低賃銀にて暮す爲に、労働者は傭主から泥製の宿舍を供されるが、それは一家族一室に限られてゐる。労働者募集に際しては醫療設備の完全なることが誇稱されるのであるが、努めて善い方面を観察せんとしたホイットレー報告でさへも、「所謂病院はあるが、甚だ不快であり……或るところでは全然醫療設備がない」としてゐる。勿論清潔な湯呑場、浴場の如き極めて稀で、マラリヤ、條蟲を患ふものはさらにあり、ホイットレー報告は「或る栽培地のマネージャーは労働者全部がマラリヤ患者なること、又マラリヤ撲滅措置は殆んど行はれてゐないを告白したこと」を述べてゐる。また栽培園の傭醫師は労働者の食事は充分だとしてゐるが、ホイットレー報告は次の如く述べてゐる。

「吾人は營養状態良好なりと認めず、随つて改善の餘地なしとは信ぜぬ。若し栽培地労働者の健康を増進せんとせば、新鮮なる牛乳、野菜を更に多量に攝らしめねばならぬ。」

栽培地では家族全部が働くのであるが、乳兒、小兒の教育等に對しては何等考慮が拂はれてゐないのである。或る栽培園では四五歳の兒童を労働者として居り、また或る管理人はホイットレー調査團に對し、子供が歩き始めると輕微な仕事を與へることを陳述したのである。而してホイットレー調査團は十歳以下の兒童の労働は禁止するも、それ以上の兒童に就ては労働時間制限の要なしとしてゐるのである。且つ六歳乃至十歳の兒童に就き教育の必要を説いてゐるが、乳兒の世話に就ては何等規定する處がないのである。

印度の栽培地の大部分は歐洲人の經營するものである。即ち北部印度に於ては九割、マドラス州及びビルマに於ては全部が歐洲人經營のものであり、クールグといふ小さい州に於いてのみは印度人經營のものを見るのである。栽培農地の利潤の如何に莫大なるかは年々印度年鑑に現はれる栽培地會社報告を見れば明らかである。例へばアツサムに於て三千四百エーカーの栽培地を有するビシュナワス茶業會社は一九二七年度に於て一エーカー當り十八磅の利潤をあげ、普通株に對し四二・五％の配當をなし、百萬エーカーの栽培地を有するニュー・ドアルス茶業會社は一九二

四年度一エーカーあたり三十八磅の利潤をあげ、普通株に二二五%の配當をなし、ドアルスに五、二七一エーカーの茶園を有するチュサ茶業會社は一九二三年より一九二七年迄毎年三割の配當をなし、一九二八年には七八%の配當をなして居り、アッサムに一八、〇〇〇エーカーの茶園を有するジャンジー茶業組合は一九二四年より一九二八年迄毎年四割乃至四割五分の配當をなしたる上、一九二八年には十割のボーナスを附したのである。

六

農村の窮乏は農村人をして工場へと向はしめる。然も其工場たるや、賃銀は低く衛生設備はお話にならない程貧弱なものである。然し工業人口は全印度人口から見れば未だ少數である。且つ家内工業の没落と共に工場労働者は殖えてゐるが工業人口全般は一九一一年來減少の傾向を示したつたのである。即ち一九一一年の工業人口千七百五十萬なるに對し一九二二年千五百七十萬、一九三一年千五百四十萬となつてゐるのである。

一九三一年の國勢調査に依れば工業、鑛山、交通業等に從事せる労働者數は左の如くである。

織物工業	四、一〇二、九三三
衣類、化粧品工業	三、三八〇、八二四
木材工業	一、六三一、七二三
食糧品工業	一、四七六、九九五
陶器工業	一、〇二五、〇三〇
建築工業	六一八、五二七
金屬工業	七一三、〇七〇
化學品工業	六〇三、五〇四
皮革工業	三一二、〇七四
其他工業	一、四九八、〇五四
鑛山	三四六、〇〇〇

交通(郵便電信電話を含む) 二、三四一、四〇六

計

一五、三六一、九三三

大多數の労働者は工場法の適用されぬ小工場に働いてゐるのである。また更に大多數のものは今猶家内工業をつゞけて居り、従つて是等のものは使用主といふものはなく、唯其製品を彼等が借金してゐる商人に納入するのである。例へば一九二一年の統計に依れば四百萬人が織物工業に従事してゐることになつてゐるが、一九二九年のホイットレー報告に依ればモーターを具へた二十名以上の工場に働くものは六十九萬六千人に過ぎぬのである。また一九三一年の統計に依れば工業労働者の中半数以上は工場法の適用を受けざる工場に働くものとせられてゐる。

七

工場労働者の多くは、農村の負債のため、やむを得ず都會に出て來たものであつて、工場に入つてから後も、しばしば農村に借金を返さなければならぬ。工場労働者は一種の世話人の手に

依つて就職するのであるが、彼等は多數の労働志願者と競争せんがために、それ等世話人に賄賂を使はなくてはならない。印度に於て勞賃は常に一ヶ月毎に支拂はれる爲に、その間金に困る労働者は、世話人に借金を申込み、結局その借金奴隷となるのである。ホイットレー報告に依れば、「工業都市に於て、労働者の三分の二以上が借金を負つてゐるが、その額は大體賃金の三ヶ月分乃至それ以上に上つてゐる。」金利は土地に依つて異なるが、普通七割五分であつて、アーメダバードに於ては二十二割五分、C.P州に於ては二十五割、ベンゴール州に於ては三十二割五分となつてゐる。斯くて最初些細な金を借りたのが、數年後には莫大な負擔となる。而して所謂金貸世話人は、労働者の賃金から差當りの生活費を除く全部を取り上げるのである。アーメダバードに於ては、少年労働者の二、三年の契約に對し、その親に年二磅五志を與へるだけであるが、是等は一種の少年奴隷制度である。

一八八一年まで印度に工場法は無かつたが、最初の工場法に於ては百人以上の労働者使用の工場に、七歳以下の兒童を使用するを禁じ、且つ七歳乃至十二歳の兒童の労働時間を一日九時間と

したのであつたが、一九二二年頃迄に種々の改正が行はれたが、その結果工場法適用工場の労働時間一日十一時間、一週六十時間とし、十二歳以下の者の就業を禁止、十二歳乃至十五歳の児童の労働時間を、一日六時間とした。現在の工場法は、斯くてやゝ完備せるものとなつてゐるが、その適用を受ける者は二千三百萬労働者の中、百五十萬にすぎない。

ホイットレー報告には、いとけなき子供が梳毛工場の埃にまみれてゐる様や、或は五歳の児童が毎週休日も無く、粗悪な食事で一日十時間乃至十二時間働き、然もその賃金二アंनाに過ぎないことを敘してゐる。

一九二六年、ベンゴールの黄麻工場には、三十一萬九千の労働者が居たが、その中の八萬は女子、二萬九千は児童であつた。女子は勿論、幼児を工場の中に連れ込み、片腕に抱きながら機械に向ふ有様である。又歩き廻る子供は機械の周りを埃にまみれ乍ら遊ぶ有様である。労働は午前七時半から、夕方七時まで休みなく行はれ、妊婦に對しても何等の配慮がなされず、一九二四年百三十二名の中、百二名は工場内で分娩したといふことである。所に依つては幼児の連れ込みを

禁ぜられるところもあるが、幼児の世話をする者がないため、之をなだめるために阿片を與へておくのであつて、一九二二年の政府調査に依れば、ボンベイ紡績労働者の幼児の九割八分は阿片を嚙ませられるといふことであつた。

一九二六年に於ける紡績労働者の賃金月額は左の如くである。

	男子	女子	児童
ボンベイ	五七志	二六志	
シヨラプール	三四志六片	一五志	九志

然るにマドラスに於ては、ボンベイの半額に過ぎないと云ふことである。(アーノ・パースに依る)

一九二八年十月ボンベイ紡績工場に勃發した總罷業は、資本家が賃金七分五厘を減額せんとしたために起つたものであるが、同爭議の調査に當つたフォーセット委員會は是を正當と論じたのである。今参考のため印度及び英米労働者の賃金月額を示せば左の如くである。

印度	一日十時間づつ二十六日に就き	三磅十二志
米國	八時間づつ二十四日に就き	十五磅十五志
英國	" "	六磅十三志

一九二六年ボンベイ労働局の調査に依れば、労働者の出費の五割七分は食費に用ひられるといふことである。

以上と異り、季節労働者の賃金は、一日男子八片、女子六片である。次に鑛夫の賃金は場所に依つて異り、ビルマの鑛山では最も良く、ビハール及びオリッサでは最も悪く、後者に於て男子の地下労働一日六片、女子四片である。ジャリア炭坑では比較的良いが、一九二九年末男子一日三片乃至八片であつた。

然るに世界不況は鑛山労働者の賃金にも影響を及ぼし、一九三一年三割三分を切下げられ、平均一日九片より六片に切下げられた。特に悲惨なのはマイルソル金山の賃金で、囚人の生活費より二三割方低く、一日二アンナ以下であつた。またカルカツタの精米所では十二時間の労働に對し八アンナが四アンナに切下げられた。一九三〇年一月一日政府は鐵道従業員の賃銀を一割減額し、次で郵便局員その他の官吏の俸給も一割減額した。

一九三一年鑛山監督官の報告に依れば、鑛山労働者中八千五百四十八名が十二歳以下の兒童であることを示してゐた。而して一九二三年の鑛山法は、十三歳以下の兒童の地下労働を禁止し、一般に地上労働は週六十時間、地下五十四時間としたのである。一九二九年ベンゴール、ビハール、オリッサ、C.P.州の炭坑及びパンジャブの鹽山に於ては、女子の地下労働を禁止したが、一九三九年七月までその実施の緩和を承認した。

炭坑の中に於て、通風が悪く、湿度高く、男女が殆んど裸體で働くのである。ラニガンチ炭坑の坑夫は、遠隔の地から移住した農民出身のものであるが、彼等は家族と共に生活道具を坑内に持込み、其處で一緒に數日間暮すのである。

鑛山の災害率は極めて高く、一九二六年の事故百九十八件、死亡者二百二十七名を出したが、その他五百四十名の負傷者を出してゐる。而して一九二四年七月、災害補償法發布まで、災害を

蒙つた労働者は何等補償の要求をなし得なかつたが、本法に依り死亡の際は百六十八磅（十五歳以下の場合十五磅）交付せられることになつた。然し印度人は斯かる権利の存することに無智であり、また知つてゐてもその審判は英語で行はれるので要領を得ず、家族の者は路頭に迷ふに至るのである。

一九二九年の工場に於ける負傷者二〇、〇〇八、死亡者二四〇で事故率は千人に就き十三人の割である。

工場労働者及び鑛夫の住宅設備は全く顧慮せられず、窓も、戸もない掘立小屋で雨露を凌ぎ得ない有様である、そして雨季になると床は沼澤の様になるのである。

ホイットレー報告は次の如く述べてゐる。

「ボンベイ市の住宅の七割は一戸一部屋である、而して一九二二—二三年労働局の調査に依れば、労働者住宅の九割七分迄一部屋に六名乃至九名住んでゐる有様である。カラチでは一部屋に六名乃至九名暮すものが人口の三分の一を占め、アーメダバードでは七割三分を占めてゐる。」

資本家にして使用人の爲舎宅を供するものは稀であるから、勢ひ使用人は家主に高價な家賃を拂はねばならぬが、其家たるや、「一部屋で便所もなく窓もなく、爲に空氣は汚れきつてゐる」（ホイットレー報告）

是を要するに各地に於ける労働者の家は殆んど人間の居住に適せぬことが報告せられてゐる。

八

失業は一九二四年以來現はれつゝある。既に一九二四年ボンベイ紡績工場の職工は一四四、五四七より一九二九年一一八、三六八に減じたが、タタ鐵工所に於ても、一九二七年三三、五二二が一九三〇年二八、六六〇となつた。また印度海員の失業も次第に増加しつゝある。特に世界不況以來此傾向は激化し、一九三二年政府は四萬の鐵道従業員を解雇し、また黄麻工場に於ても、八萬の失業職工を出した。失業対策は何等講ぜられず、失業者は貧しき農村に歸り、親戚をたよりとするか、町に乞食する外はない。一九三三年七月のボンベイ・クロニクルは「乞食が次第に殖え

警官も是には手の下し様なく、乞食は到る處列車中に泊り込み、交通を妨害してゐる」と述べてゐる。

低賃銀、失業、住宅及び衛生設備の不良は病氣を多くし、死亡率を高め、印度人の平均生命は二十三年（英國では五十五年）に過ぎぬ。然かも一八八一年頃は印度人の平均生命は三十年であつたのである。一九三〇年の印度の死亡率は千名に就き二十六・八である（英國一・七）一九一八年流感に依り死亡せるもの一、〇〇〇、〇〇〇で千名に就き六二・四六であつた。是を各都市別に見れば千名に就き、アグラでは一二八・九五、カウンポール、九九・九一、プーナ、八二・五であつた。ペントリー博士は次の如く述べてゐる（一九二七—二八年報告）。

「ベンゴールの死亡者は年百五十萬であるが十五歳以下のものが其十五％七十五萬を占めてゐる。然かも死亡者の二十五％は治癒し得る病氣に罹つたものである。今日ベンゴールの農民の大部分は鼠すら五週間も永らへ得ない様な食事をしてゐる。自然彼等は病氣に對する抵抗力がない。昨年度コレラにて死亡せるもの一二〇、〇〇〇、マラリア三五〇、〇〇〇、結核三五〇、〇〇〇であつて、初生児の死亡者は五萬五千を算する。」

一九三〇年の統計に依れば、コレラ、疫病、天然痘に依る死亡者四三四、〇〇〇、マラリア其他の熱病に依るもの三五〇、〇〇〇、呼吸器病に依るもの四〇〇、〇〇〇となつてゐる。マラリアの爲入院するもの年八百萬を算するが入院せざるものは更に多數に上つてゐる。ジョン・メガウの調査に依れば農村人口の一〇乃至一五％、千三百萬が性病を患つてゐるといふ事である。また結核患者は二百萬以上と言はれ、營養不良に因る夜盲は六百萬とせられ、またマラリア患者は年五十萬に上るものと測定せられてゐる。

メガウ報告は印度人口の三九％が營養良好であり、四一％不良、二〇％劣悪としてゐるが、ベンゴールに於ては最も悪く、良好なもの二二％、不良四七％、劣悪三二％となつてゐる。また農村の四〇％では食糧より人口の方が過剰であるとせられてゐる。またマンチエスター・ガージア紙は次の如く述べてゐる。

「印度は營養不良の國であり、平均生命は普通の半分以下である。村落五の中一は食糧に苦ん

で居り、死亡率高きに拘はらず人口増加率は食糧増産力を遙かに凌いでゐる。またマラリアは全印度を掩つて居り、斯かる状態の打開には眞摯な努力を必要とする。」

印度に於ける幼児の死亡率は千に就き二三二・六であり、U・P州に於ては千分の三百三である。産婦死亡率は千に就き二四・五であるが、ベンゴールでは特に千に就き五十となつてゐる。(英國では千に就き四・六。一九三二年)

右に就きホイットレー報告は幼児死亡率の高きは貧乏と無智によるとしてゐる。而して全印の平均は千分ノ二百乃至二百五十であるが、ボンベイ二百九十八、マドラス三百、ラングーン三百五十とあり、一部屋だけの労働者の家族では千名に就き五百七十七名の死亡率となつてゐる。

九

最近資本主義の發達と共に労働者に初等教育を施す必要が痛感せられ、文明國に於ては概ね義務教育を行つてゐる。而して印度に於ては數年間論議の後立法議會は是を採決したが、一九二九

—三〇年度に於て是を行へる都市百三十二、農村三千百三十七に過ぎない。

サイモン報告に依れば英領印度の税金収入より一人當り三志四片の軍事費が支出せらるゝに對し、教育費は僅か九片である。パロダ王侯國の教育費でも英領印度の三倍に當つてゐる。一九二八—二九年英領印度は二億四千萬人に對し千萬磅を支出したるに過ぎない(英國は四千萬民に對し四千萬磅を支出してゐる)。左表は軍事費に多額が費消せられるに反し、教育及び醫療に極く僅かが使用せらるゝに過ぎぬことを示してゐる。

一九三〇—三一年支出豫算

軍事費	四三・七一(百萬磅)	二五・二九%
教育	一一・〇九	六・四二%
醫療保健	四・七九	二・七七%
警察及監獄	一一・四八	七・二二%

政府の調査(一九三〇—三一年)に依れば英領印度の二億四千九百萬中二億二千九百萬が文盲で

印度は叫ぶ

一三二

あり、印度全體に就て読み書きなし得るものゝ率は、男子七人に就き一人、女子五十人に就き一人の割となつてゐる。

教育に就ては左の如く王侯國に於て却つてすぐれたるものがある。

讀書なし得るもの男子百人に就き(五歳以上) 女子百人に就き(五歳以上)

トラバンコール王侯國 三八・〇

一七・三

コーチン "

一一・五

パロダ "

四・七

英領印度

二四・四

二一・〇

英領印度五十萬の農村にある小學校は十五萬七千校にして、一九二九—三〇年英領印度の學童及學生總數は千二百萬人に過ぎない。而して一九二二—二六年調査に依れば四年間出席を續ける學童は男子十九%、女子十%に過ぎず、一年以上出席するものは四十%以下との事である。

印度の女子人口は一億二千萬であるが現在何等かの教育を受けつゝある者は二百萬人である。

十

英領印度に於ては灌漑工事の破損を防ぐ爲灌漑法令に依り強制労働が課せられる。またボンベイ、ビハル・オリッサ州に於ては道路、建設物の爲に強制労働が課せられる。

印度に於ける警察の権力は絶大である。評判の悪いもの、生計の出来ぬものは直ちに逮捕せられ、保證人の現はれる迄釋放せられない。

一度監獄に入れられると其罪刑が如何いふ風になつてゐるか何も判らず、時としては獄吏も是を知らぬことがある。實に印度の警察程腐敗し、残忍で貪欲なものは何處にもない。

農民または労働者にして投獄されたものは其罪の何たるやを知らぬものが大部分である。獄舎は設備としてなく、電燈もない處で一日一片半以下の食事で九時間働かねばならぬ。而して刑の宣告の前後を問はず笞刑を受ける。一九三二年の笞刑件數記録は六、一八九件となつてゐる。而して一九三三年ボンベイ立法議會は世論の反對に拘はらず笞刑法を通過せしめたのである。非軍事不

印度は叫ぶ

一三三

服従運動の爲投獄せられたるものは、ガンデイ、ネール等を除き、不良なる待遇を受け、爲に彼等は屢々ハンガー・ストライキに訴ふるに至つた。而してアンダマンの獄は一旦閉鎖されたが、後日再開され九十六名の政治犯（多くは學生）が收監されたのである。一九三三年七月彼等は不法待遇に抗し、ハンガー・ストライキを行ひ、中三名は餓死するに至り、茲に始めて政府も事態調査にあたることとなつたのである。

十一

印度が如何なる國であるかを活寫するには貧困、病疫、大衆の文盲と共に王侯、地主の贅澤さを見なければならぬ。英領印度に於て地主の搾取に對しては猶且つ法の制限があるが、王侯國に於いては何等の制限なく、住民は英領印度に於けるより更に惨めな状態にある。

王侯の権力は一定のものでなく、或ものは無制限の権力を持ち、或るものは甚だ制限されてゐるが、それは結局英人駐在官の考へ如何によるからである。然し概して専制的であり、人民は損

害を蒙つても何處にも訴へ様がないのである。

マイソル王侯國には二百七十三名を以てする代表議會、五十名より成る立法議會あり、パロダ王侯國には二十七名より成る立法議會があるが、其他の王侯國には何等の議會もない。従つて立法は王侯の意思に依り何時でも改廢することが出來、また王侯の意思一つで何人も不定期間投獄することが出來、何等の理由なく且つ審理を経ず追放することが出來る。

王侯は何人の財産をも沒收することが出來、また提訴を棄却することが出來る。人民は王侯またはその役人を權利侵害の故を以て訴へることが出來ない。多くの王侯國に於いて集會、結社、新聞の發行が禁止せられ、然らざるものと雖も前以て王侯の許可を必要とせられてゐる。王侯に反するものには早速警察の手が伸びるのである。

王侯の後嗣は幼時より放逸に育てられ、英國の指示する學校教育を受けるが、彼等は子供の時から萬人を搾取する様教へ込まれる。而して英國は王侯國軍隊が鎮壓し得ない様な叛亂の起らぬ限り、王侯と人民との間に干渉しないのである。斯くて多くの王侯は人民に重税を課し、男女を

無報酬にて強制勞役に服せしめ、一方出来るだけの贅澤を盡しながら、教育、土木の如き何等顧みぬに至るのも無理からぬ處である。偶々王侯の施政不良にして退位する時も、多額の金を慰勞金として收得するのである。

ピカネル王侯國（人口六六萬）の豫算に依れば（一九二九年）教育費三・六%なるに對し、官殿の建設其他王侯の費用二二・六%であつた、即ち是を金額に表せば教育費一五、〇〇〇磅なるに對し、王侯費一七〇、〇〇〇磅であつた。然し是はまだよい方で、一九二六年ジャムナガル王侯は國の歳入の五割を自らのため使用し、またアルワル王侯は自己の自動車及びガレージの爲六六、〇〇〇磅を使ひながら國民の教育費として七、五〇〇磅しか支出しなかつた（アルワルの人口七〇萬）。

十二

一八三八年以後、歴代印度總督の政策、即ち大兵亂を生ずるに至らしめた併合政策並びに戦争

は、出費を著るしく増加し、是に對する歳入が伴はなかつたのである。然しそれでも一八五七年までは、若し東印度會社株配當、職員給料及び年金、英軍駐屯費及び輸送費等が無かつたならば、公債を募集せずして財政のバランスを得ることが出来たのである。今印度財政統計（一八三七年以後）を見るに、次の如くである（單位百萬磅）。

年 度	歳 入	英本國に於ける支出	印度に於ける支出
一八三七—三八	二〇・八	二・三	一九・八
一八五六—五七	三一・七	三・五	三一・六
一八五七—五八	三一・七	六・一	四一・二
一八七六—七七	五六・〇	一三・五	五八・一
一九二一—二二	一八五・六	五〇・〇	一二二・〇

一七九九年に於ける印度の公債は一千萬磅であつたが、その後ウェルズレイ卿の戦争があり、一八〇五年には二千百萬磅となつた。次の三十五年間には三千四百五十萬磅に増加したに過ぎな

かつたが、一八四〇年のアフガン戦争のため、一八四四年より四五年までに四千三百五十萬磅に増加した。而して約千五百萬磅を消費したアフガン戦争の戦費の膨大なりしことに就てはかのジョン・ブライトも英國下院に於て抗議的演説を行つたのである。一八五六―五七年には五千九百五十萬磅となり、翌年には六千九百五十萬磅となつたが、その後數年間に印度各地に英國軍隊が駐屯することとなり、歳出はますます増加するに至つた。而してチャールズ・デイルケに依れば七萬の英國兵が新たに駐屯することとなつたが、是が兵舎建設のため千萬磅を必要とし、一八六〇年には公債一億磅を算するに至つた。

更に政府は、鐵道及び灌漑工事を無暗に建設し、是がために公債を募集し、一八七七年には公債一億三千九百萬磅となつた。

東印度會社もまたその支配期間中六千九百五十萬磅の公債を募つたが、英國政府となつてからは十九年間に右の額の倍となるに至つた。斯くて膨大なる經費増額を抑制すべく、一八七一年グラッドストーンは印度財政調査會を設立したが、何等の成果を收めなかつた。

英國資本家は、更に鐵道の新設、電信電話の架設、及び駐兵の増加を要求し、廿世紀に入るや公債は二億となり、一九三〇年には七億二千百萬磅となつたが、その中三億六千四百萬磅は英國に於て募集されたもので、印度は是に二分利半乃至五分利半の利息を拂つてゐる。

抑々、印度總督及び印度王侯は、英國陸軍及び空軍に最後の望みをかけてゐる。斯くて一九三三年には、英國兵五萬九千二百五十が印度國庫より俸給を受けてゐたが、是等は英人一に對し印度人三の割合で所謂印度陸軍を編成してゐる。其の他に英人義勇軍約二萬九千があるが、在印英國空軍は六個聯隊より成り、英國士官百六十名、兵九百七十名、印度人百四十八名より構成されてゐる。印度軍總兵力は十六萬六千、豫備三萬六千であつて、王侯國軍は四萬四千である。他に印度陸戰隊が最近印度海軍に改編せられた。

印度の軍事費は極めて膨大で英兵一人の費用は印度人兵士の三、四倍につくのである。而して一九三三―三四年の軍事費は約三千七百五十萬磅の豫算の四割に相當してゐる。

英國は對印投資七億の利子を得るのみならず、海運に於いて印度から莫大な利益をあげてゐる。

印度は各種農産物に富むばかりでなく、金、銀、鐵、銅、石油、鹽、マンガン、鉛、石炭、雲母、ルビー其の他の鑛産資源に富んでゐるが、英國の飽くなき搾取の爲、國民の大多數は常に饑餓線上を彷徨してゐるのである。

第十章 印度及び印度文明の價值

印度は風光に富み、土地は肥え、森林多く、高山大河多く、然かも他方に草木無き沙漠、砂だけの平原があり、氣候は暑熱、酷寒の兩極端に亘つてゐる。印度は天然の研究及び人文の研究にとつても極めて興味が深い。その言語たと宗教、神話、哲學、慣習、法律たとを問はず、人文史上の貴重なるものはすべて印度に求め得る。

ギリシヤのプラトーン、タレーズ、ピタゴラスの如き思想體系を發生せしめた根因は何處に在つたか、歐洲の天文學者、彫刻家、建築家、音樂家を驚かすやうな業績は何處に求め得られたか。それは印度である。

一八六一年十二月のカルカッタ評論に曰く、「印度人は古くから商工國民であり、その綿布、絹布は世界中で賞讃された。然かもギリシヤ人が賞讃するほど哲學的思考力に於て勝れ、また天文

數學に秀でてゐた。」

ピエル・ロテイ曰く、「古代印度の藝術哲學は、まことに勝れたるものがあつた。頽廢せる、神と魂を知らぬ卑屈なる西洋が、古代印度の素晴らしい思想を知れば驚嘆するであらう。」

一八七二年のエデンバラ・レヴューに曰く、「印度はすぐれたる文明を有せる世界最古の國民である。我々が是を研究すればするほどその偉大さ壯麗さに打たれるのである。」

スリーマン大佐は言ふ、「印度の同じ村の者同志で嘘を吐くものは一人もない。嘘をつけば財産が出来、命が助かるといふ場合にも嘘を吐かなかつた例を自分は百以上も知つてゐる。」

マックス・ミュラー曰く、「印度人の特質は眞理を愛するといふことである。」

マガステネスは曰く、「印度人の中には奴隸制度なく、婦人は貞節であり、男子は勇敢にして、その眞面目さ勤勉さは他の亞細亞人中之に比すべきもの少なく、百姓工人共に優秀であり、彼等の間には訴訟が行はれることなく、平和に暮してゐる。」

アブル・ファザル曰く、「印度人は信仰深く外人に丁寧であり、陽氣で知識と正義を愛し、商賣

に長けてゐる。

ニール曰く、「印度人は世界中で最も寛大な國民である。彼等は温順であり、勤勉であり、他を傷けるといふやうなことは全く無い。」

古代印度に於いて盜賊は全く居なかつたが、最近ストラボも「印度人は正直であるから戸に鍵をかけず、契約に書き物にするやうなことはない。」と云つてゐる。

有名な支那の學者に依れば「印度人は正直であり決して不當な富を得ようとはせず、人に對しては寛大すぎるくらいである。」と述べてゐる。

ペディズル・ゼマンに依れば「印度人は嘘も云はなければ暴力をも用ひない。彼等は死をも生をも恐れない。」

マルコ・ポーロ曰く、「印度人は世界中で最も良き商人である。蓋し彼等は決して嘘を云はないからである。」

或る英人官吏も印度人が決して不渡手形を發行しないことを述べてゐる。

印度初代總督ワレン・ヘスチングス曰く、「印度人は温順で、少しの親切に對しても感謝し、他人の悪行に對して容易に返報しようとはせぬ。」

タゴール翁曰く、「印度は今や復興せんとしてゐる。印度は過去に於いて偉大なる文化を生んだが、現在及び將來に亘り世界の文化に寄與せんと努めつゝある。」

有名なる東洋學者マックス・ミュラーは、その著『印度は我々に何を教ふべきか』において曰く、「世界に於いて富と力と美の上に最も恵まれた國と言へば、印度を措いて外にない。また人間の心が、最も完全に發達し、人生の最大問題について深く考へ、プラトニー、カントの研究者をしてすら注目せしむるやうな問題を提起したものは、印度を措いて外にない。更に我々ヨーロッパ人が吾人の内的生活を完全ならしめ、眞に人間としての生活を営ましめるやうな文學を求めるとすれば、是亦印度を措いて外にはない。」

英國が始めて印度に侵略を試みた時、印度の文明は如何なるものであつたか、この問題について、一八一三年、有名なマドラス知事トマス・マンロー卿は、英國下院の委員會で次のやうに述

べてゐる。

『農業の巧みな組織、比類なき工業技術、生活内容を豊ならしめるものゝ生産能力、読み、書き、算數を教授する村毎にたてられた學校、人民間の慈善、同情心、特に女性を信じ、尊敬し、優しく取扱ふこと、是等のものが文明國民としての表徴だとすれば、印度人はヨーロッパのどの國民にも劣つてゐない。而して、若し文明が輸入し得らるゝものとすれば、我が英國はかの國よりの輸入によつて必ず利益し得るものと信ずる。』

ヘレン教授は曰ふ、「亞細亞のみならず全世界が印度に知識と宗教を學んだ。」

印度文明は單に阿育王時代より回教時代に至る間に現はれたる無量の知、所産を一瞥するだけでも驚魂駭魄に値する。

是等の資料は、漸く近年に至つて學者の研究する所となつたが、其の明かにされたものは、存在せるものゝ一部なることを忘れてならぬ。

而して其の研究の範圍は、認識論、論理學、文法、修辭學、言語學、天文學、數學、醫學、藥

學、建築學、造船學より、ひいては一切の社會的科學、實踐的科學に及んで居る。即ち政治、經濟は言ふまでもなく、繪畫より舞踏に至る一切の藝術、生活に必要な一切の事項、例へば馬の飼育法、象の調御法の如き、或はまた性の問題に至るまで、悉く一個の學術として其の術語を有し、其の専門著述を有して居た。當時の印度精神は、一面に飽くを知らぬ好奇心、一切を知悉せずんば止まない欲求と、他面には綜合統一の精神、即ち知り得たる一切を整理し組織せんと欲求に燃えて居た。

加ふるに印度は、異常なる實踐的精力、滾々不盡の創造力を有して居た。驚くべき早熟の天才 B・K・サルカルが、見事に英譯し且つ解説したシユクラニーチ一卷を讀んだだけでも、社會的、政治的方面に於ける印度精神の活躍を窺ひ得て餘りある。

まことに印度は息むことなく、疲るゝことなく、無限の豊富と多様とを以て、民國、帝國、宮殿、寺院、都市、城壘、乃至數々の團體、擧げ來れば際限もない現實の施設を創造したのである。

印度人に實行の能力なしなどと言ふは根も葉もなき放言である。

試みに西紀前第四紀の著書とせらるるアルタクシャーストラを繙けば、當時の印度政府の行政組織の叙述がある。それは十八省に分れて居るが。一例として軍務省の組織を見るに、軍務局、海軍局、陸軍局、歩兵局、騎兵局、象軍局の六門に分れ三十名の幹部より成つてゐる。孔雀王朝の創立者、印度のナポレオンと呼ばれるチャンドラグプタ大帝の常備軍は、歩兵六十萬、騎兵三萬、象兵九千、戰車衆多と算せられて居る。かくの如き大軍を組織編制して國防外征のために用ひたる國民を偏へに出世間的と謂ひ非實際的と謂ふは、埒もなき詭言と言はねばならぬ。

また印度の羅馬とも言ふべきパータリプトラの都市計畫及び其の行政を見よ。市は幅二哩半、長さ九哩にして圍繞するに城壁を以てし、城内六十四、壁上に聳ゆる大小の塔五百七十とあるを見ても、其の規模の雄大を知るに足る。當時市の三十長老は、相會して市政の衝に當り、六局によつて事務を分掌した。一は市民の工藝を管轄する工藝局、二は入國する外人に關する事務を取扱ふ外事局、三は歳入其他の目的のために出產死亡を明かにして今日の戸籍事務を取扱ふ統計

局、四は商業及び度量衡を管轄する商業局、五は製造業を管轄する工業局、六は稅務局である。法顯の南海寄歸傳を繙いても、印度の市制が甚だ發達して居たことを立證する幾多の記事がある。

またラダクムード・ムケルジ教授の周匡精到なる研究によつて、上代印度の海外發展の事實も漸く明白になつて來た。印度の造船は、猶太、埃及、羅馬の諸國と盛んに貿易を營み、印度洋並に多島海幾多の植民地を經營し、商業的利益を收めると共に、印度の藝術と詩歌と信仰とを弘布した。ムケルジ教授に據れば、上代印度の造船術並に航海術は、意想外の發達を示し、能く三百乃至八百の船客を容るるに足る巨船を造り、其の最大なるは千五百の船客を收容し得たとのことである。

第十一章 第一次印度革命の彈壓

英國の印度征服は必ずしも軍事的方法によるものではなかつた。否、片方を脅かすと共に、別の方には希望を興へて操り、精神的にも物質的にも印度の助けを借り求めて、やつと印度を征服し得たのである。斯くて印度征服史は、實に惡辣手段の限りを盡してゐるが、現代の印度に關する限り、之等すべては大ていかくされた頁になつて了つた。

唯、時に「法治政府」を顛覆しようとして英國法廷に檢舉される印度國民運動志士のことを聞いて微笑を感じるのみである。然し「一體その法とは何か」又「誰がその法を定めたのか」、人は斯く訊ねざるを得ない。

一八五七年の第一次反英印度大革命を十九世紀に於ける印度人の最初の革命運動として茲に少しく取り上げて見よう。

「此の運動は政治的なものであると共に國民的なものであつた。内部的な原因及びそれを推し進めた力は多々あつた。」

印度教徒と同教徒の結合、革命運動組織の完璧、反亂参加者が戦ひ抜いた頑強さ、一揆には附物の裏切が比較的少かつた事等はすべて此の革命の特徴をなすものである。

然し、一般民衆は革命家の建設能力に信頼をしなかつたので、それは失敗した。革命家は英國人を驅逐して了ふまで、建設的時期を延ばすと云ふことに一致してゐたが、民衆にはそれが出来なかつたのだ。前世紀に於ける軍事行動及びそれに續く無秩序、無政府状態に民衆の忍耐力はすつかり消耗してしまひ、革命軍を支持し、成功した場合にも同じ様なことを繰返すことになりはしないかと危惧したのである。

以下如何にして此の革命戦を英國人が鎮壓したかの記録の若干を示さう。

一、ケイ及びモーレスン共著「印度反亂史」より――

(同第二卷二六七頁記載)

第五十五軍の反亂者は我々が戦鬪中に捕虜にしたので、少しも容赦するに値ひしなかつた。然し熟考の末、全部を殺したくはなかつた。百廿人と云ふ數は殺すにはあまり多い數である。我々の目的は他をおどす見せしめにすればよいのである。此の目的は四分ノ一か三分ノ一をやつつけば效果的に得られると思ふ。何處か悪い處の見えた者を選びたかつたのである。例へば性質の悪い者、亂暴者、不平の色の濃い者、第廿六軍の前で數日の間將官に對して不服従の舉動に出た者、かう云ふ者どもである。若し所定の數に達せぬ場合は最年長の者から加へて行かう。斯くて之等は皆射殺されるか大砲の砲口に縛り吹き飛ばされたのである。殘餘の者は區分して、或る者は十年、或る者は七年、五年、三年と云ふ風に收監するのである。

二、同(第二卷二〇三頁記載)

戒嚴令が布告された。あの恐怖すべき法令は五月に立法會議を通過し、六月には實施された。そして血腥い巡回裁判を開き、或は巡回裁判もせず、反亂兵士も一般人も、老若男女の區別なく土人を虐殺した。後に至つても血への渴^{かわ}えは愈々強くなるばかりであつた。印度總督が本國に送

つた書類には老人、女子供も反亂者と同じ様に犠牲にしたと記されてゐる。是等の者は悠々と絞殺などされなかつた。村ごと全部焼殺されたのである。時には射殺されたものがあるのも勿論である。

英國人は「一人も容赦せず、又黒ン坊を蹴り苦しめることは愉快な暇潰しで素晴しく面白」と躊躇せずに誇り、又書き物の中にその自慢を記録してゐる。

英當局者によつて推薦された或る本に、「三ヶ月間といふもの八臺の死骸運搬車は四角や市場で絞殺された死體を運び去るため日の出から日没に至る間絶え間なく往復し、六千人が此の如くして一様に片附けられ、幽冥の國へ送り出されたのである。」と記してゐる。

三、(同第二卷一七〇頁記載)

既に我々將官達は罪人といふ罪人を全部狩り立て、野良犬か、豺か、蛆蟲でもあるかの如く、何等良心の苛責なしに之等の者を絞殺した。亦、同時代の一著述者は「其の朝、武装解除された者の列を造幣局から見ようとすると、最初に見えたのは一列の絞首臺であつた」と書いてゐる。

それから二、三日すると軍事裁判か委員會が日毎に開かれ、老も若きも區別なき暴虐な絞殺刑を宣告された。

或る場合など、戯れに二、三人の少年が革命軍の旗を持ち、大鼓を鳴らさうとしたと云ふだけで裁判され、死刑の宣告をうけた。此の軍事裁判官のうちの一人の將校は武装せる敵に對しては微塵も容赦はしないかほりに、弱き者や力なき者には憐みを持つと云ふよく眞の武人に見る様な人であつたが、眼に涙を浮べつゝ上官の前に進み出で、此の年少反則者に對する宣告を取り消す様に懇願した。然し何等の効果もなかつたのである。そして軍法會議又は刑事裁判を正式に示して處理されたものは、全然裁判なしで處理されたものより更に悪い位であつた。

絞殺係志望者は地方々々に出かけ、斯る俄か造りの執行者は其の場合々々に事缺かなかつた。一人の紳士はマンゴの木を首架の代りにして手際よく行つた處刑數を誇ら顔に話し立てたが、こんな無暴な裁きの犠牲者は、時經つに従つて8の字形に釣り上げられるのである。

拷問裁判についてはホームズの「印度兵變史」の百二十四頁を見るとよい。「將軍連は軍事裁

判所に着席すると、罪があらうとなからうと先づ囚人を絞刑に處したいと述べる。簡単な裁判の後囚人は死刑の宣告をされるが處刑の前に無智な兵卒によつて慘虐に戮られ、教養ある將官運はそれを眺めつゝけしかけるのである。「我々に何等の危害も與へなかつた老人や胸に乳飲兒を抱いたか弱い女も極悪人と少しの差別もなく我々の復讐の手段を蒙つたのである。」

サヴァルカル著「印度獨立戦争」中に引用した「デリー攻撃史」を見よう。百拾壹頁に、其處に勤務してゐた一將校によつて、アムバラからデリーへ行く道に何千と云ふ人間が幾列にもなつて軍事裁判所の前に拉致され、絞殺か銃殺の刑を云ひ渡された。或る場所では銃劍や槍の先へ牛の肉を突き刺し被告の口に無理に押し入れた。(印度人は牛の肉を忌み、之を食するより寧ろ死を望む。)

又、チールズ・ポールの著「印度の反亂」第一卷二百五十七頁を見よ。「此の旅行は素晴しく愉快だつた。我々は砲を持つて船に乗り、其の間シク軍と輕歩兵は市の方へ進軍した。我々は左右に向いて發砲しつゝ遂に或る場所に到着した。そこで、我々は上陸して銃を亂射し、私の古

銃は數人の印度人を倒した。報復に飢ゑてゐた私であつた。我々は左右に發砲した。炎は微風にあほられて擴がり、復讐の陽が反逆者の上に落ちんとするかの様に天に沖したのであつた。毎日謀叛した村を焼打ちしに出かけた。私は政府及び官吏に對する罪過で檢束された土人裁判の委員長に任命された。毎日々々八人から十人の人間を吊し上げた。我々は生殺與奪の權を握つてゐる。決して遠慮などしなかつた。すべて略式の裁判で決定される。宣告をうけた罪人は木の下に連れ出され車の上に乗せられ、首に繩をかけて車を引くとブラ下る譯である」。

「パンヂャブのアジメラの近くの小さな島では、政府から疑はれ武装解除の上射殺されるのではないかと云ふ恐怖の下に多くの印度兵が行動中の聯隊から逃亡して、姿をかくした。そこで護衛兵をひきゐてクーパーは彼等を捕へた。全員二百八十名はそれからアジメラへ送られたが、彼等を如何にしようかと云ふことが問題になつた。公式に裁判を受ける場所へ送る方法がない。他方、若し一樣に處刑するならば、他の聯隊や計畫中の反逆者にとつて彼等將來の運命の戒めになり是以上の流血の慘も防げるかも知れない。是等の理由で、クーパーは全部を死刑にする決心を

した。

よつて翌朝十人づゝ引出しシツク兵に射殺させた。斯くの如き方法で貳百十六人の人間が滅死したのである。尙残りの六十六人はターシルの稜堡に監禁されてゐた。クーパーは抵抗を豫期して戸を開けさせたが、コトリと音もしない。四十五人は死骸となつて横はつてゐた。クーパーには解らなかつたが、窓がピツタリ閉つてゐたので、憐れな囚人は窒息死に陥つたわけであつた。残餘の廿一人は仲間と同じ様に射殺された。此の權威ある素晴らしい獨斷のために、クーパーは單純な人道主義者から、病的なほどの非難を浴びた。然し、ロバート・モンゴメリーはクーパーがラホール地區を救つたと云ふことを證明して見當外れの辯明をしてゐる。(以上ホームズ著「印度反亂史」三百六拾參頁)

敵影の見えない場合、出動した兵士の或る者は、何等罪のない兵營の召使や、從僕や、其他教會の境内の近くで何か譯も判らぬ驚愕に慌ててゐる者を虐殺した。(以上ケイ及びモーレソン著「印度の反亂」第二卷四百三十八頁)

第十二章 アムリッサル事件當時の大彈壓

本章は印度に於いて行はれた英國の暴虐を一九一九年のアムリッサル事件を中心に述べた赤裸々な記録である。これを讀む人が以て印度が如何に獨立の爲に闘つてゐるかを推想するところが出来るならば、我等の努力は完全に酬いられたも同然である。本章に述べられた事項は、總て權威ある資料から採録せられたものである。

一

印度に於ける大虐殺の當の責任者であるダイア將軍は「余にとつて佛蘭西の戰場もアムリッサルも同然だ。」と述べてゐるが、彼は全然無辜の印度人老若男女に無制限の射撃を命じた人である。佛蘭西の戰場では交戦者双方共武器彈藥を有してゐたが、パンジャブの戰場では、身に寸鐵

を帯びぬ印度人男女が、完全に武装せる英國兵の銃揮を受けねばならなかつた。

然し、ダイアは英國に決して珍しい人物ではない。

英國にとつて武器なき人民の虐殺、婦人襲撃、兒童射撃は決して事新しいことではなかつた。英帝國主義者の中には斯かる事實を關知せずと稱するものもあるが、歴史は英國の不法、非人道、彈壓、壓迫、迫害の明々白々たる證據を提示してゐる。

東印度會社時代より今日に至る迄、會社職員、藍または胡椒栽培主、茶栽培主、或は英國人知事、兵士、官吏が同様の殘忍な行爲を行つて來たのである。

人道主義の假面を剥ぐと、其處には動物其の儘の英國の姿が現はれるのである。

印度の不満は随分永らくのものである。印度の政治的、經濟的、社會的、知識的生活は無慈悲に破壊せられた。英國商人の不正及び殘忍、印度工業の破壊及び農業的發展の抑壓、飢ゑ且つ自由を奪はれた人民の不満は、機會だにあらば爆發せんとして來たのである。

二

一八二二年の英國議會の東印度會社關係報告は、當時既に印度に革命運動のあつたことを記してゐるが、一八五七年に至り、果然獨立戰爭が全印に亘り展開せられた。更に、一八七八年にはリットン卿の彈壓政策がまたもや印度を反亂の渦中に陥れた。一八八三年—四年は更にまた全印が革命的亢奮に包まれ、到るところに革命的行爲が行はれた。一八八五年創立せられた國民會議は立憲的運動を行へるに拘はらず、政治的不満の暗流は至る所に横溢した。やがて分割支配政策の産物たるベンゴール分割案が提示せらるゝや、革命主義團體の活動はその極に達した。

爾來英國は秘密條令、新聞紙法、刑法改正案、集會法、出版法、謀亂法の發布其の他の彈壓的措置に出づるに至つた。更に一九一八、一九一九、一九二七年にはそれ／＼大掛りな追放處分が行はれたが、是等すべてを以てするも國民の不満、革命的活動を根絶することが出来なかつた。

印度は自治の能力を有するのであつて、英國が是に霸權を振ふ權利を持たない。印度國民は法

律的にも倫理的にも英帝國主義より完全に分離する権利を持つ。人類の五分ノ一を占むる印度人は印度及び人類の名に於て共存共榮の原則を實現せんと欲してゐたのである。

世界戦争が始まつた時、印度人はその實際の原因を承知し、直接戦争に關心を持たなかつた。然し乍ら印度は人的資源及び財的資源を以て英帝國を救はねばならなかつた。

然るに英國政府は極めて神性質となり、英國の統治に反對するものは公判を経ずして判決し得る條令を發布した。斯くて革命黨員は容赦なく處分せられ、また幾多の罪なき男女及び子供が不正なる處置を蒙つたのである。

次いで、英國軍隊に編入せしむる兵士の徴發、戰費の強制寄附が始まつた。是等は名目上は自發的意志に依ることになつてゐたが、實際は各州にそれ／＼割當て、武力を以て徴發したのであつた。政府は個人所得の四分の一乃至二分ノ一を要求し、その徴收は強制的であつた。英國人判事コルドストリームに依れば、斯かる徴收または兵の募集に際して、各地に官民の衝突が起つたといふ事である。

土地を持つものは總て一エーカーに値する金額を寄附せしめられた。英國政府は下級官吏を昇給または資格の好餌を以て誘ひ、従つて是等官吏は徴收に際し様々な方法を案出した。

各村毎に男子の名簿表がつくられ、兄弟三、四名ある家族から一、二名の男子が兵士として徴集せられたのである。

そして、若し男子が應募しない時は女子に迫害を加へ、男子家族の應募を否應なしに行はしめたのである。即ち、女子には棘を以て苦しめ、男子は裸にして棘叢の中に立たしめたのである。一人の壯丁を得るために全村民が迫害せられた例も少くなかつた。即ち村民の家から家具を運び出し、または是を焼却し、或は灌漑路を絶ち、志願することを拒絶せるものに對しては射撃が行はれたこともあつた。

パンジャブ州副知事マイケル・オドイアに依れば、北印度ムルタン郡に於ける強制徴兵率は、一九一七年に於て五百八十六名に就き一名の割合であつたものが、一九一八年十一月には九十三名に就き一名の割合となつたといふ事である。またグジュランワラ地方に於ては男子四十四名に就き

一名、徴兵適齡期の男子十四名に就き一名が徴集されたといふことである。

三

國民會議調査委員會に於てグジュランワラのサルダル・カンの述べた處に依れば、當時に於ける徴集の状況を髣髴する事が出来る。

曰く、「徴兵官が我々の村へ來たのは四月五日頃であつた。眞夜中に太鼓が打鳴らされ、みんな翌朝村の廣場に集る様命令せられた。丁度其の頃は收穫時であり、みな徴兵されることを恐れ、一部のものが翌朝集つたが、これが爲、徴兵官は六七十名の村民に罰金を課した。

次いで村民に對し、村から十八哩のグジュランワラに集まる様に命ぜられた。指定の日其處に赴くと、一同一列に並ばされ、其の中から七名の若者が選抜せられた。そして他のものは毆られ、もつと役に立つものを揃へて來いと命ぜられた。」

第一次世界大戰當時英國の爲、印度は斯くの如くにして戦はしめられたのである。

斯くの如く兵士または金員の「應募」を強制せられなかつたものに對しては、戦線の英國兵士に送る食糧の負擔を課せられた。英國政府は印度の小麥(印度は世界第三位の小麥産出國である。)を徴發した。英國兵は此の穀物のお蔭で太り、印度の麥と米からつくられたアルコホールに酔つてゐたのである。

四

他方、何等武器を有せぬ印度の男女が一致團結し、永らく希求し來つた獨立の爲蹴起する恐れありとし、印度人の自由を益々束縛し、言論を壓迫した。運動、思想の僅かな自由迄も不法なる彈壓の爲破壊せられた。

大戰休止と共に、其の時迄に革命運動を調査し、警察記録、在印英國官僚の言に基いてつくつてあつたローラット委員會の勸奨に依り、ローラット法案が作製せられた。印度人は學つて同案の通過に反對したが、同案の内容は次の如きものであつた。

(イ) 嫌疑ある印度人は令狀なしに逮捕することを得、且つ審理を経ず不定期間監禁することを得。

(ロ) 舉證は被告是をなすべし。

(ハ) 被告には告發者及び證人の名を知らしめず、且つ是等のものと對質せしめず、唯其の罪狀を記せる書狀を示すものとす。

(ニ) 被告には辯護人、證人を認めず。

(ホ) 被告に對する宣告は高等法院に於て秘密審理に依り是を行ふ。

(ヘ) 陪審は是を行はず、控訴を認めず、本法に依る命令は裁判所に於ける解釋を許さず、本法に依り善意に行動せるものに對しては訴追をなすを得ず。

(ト) 被告に對しては告發事項以外に就いても宣告をなすことを得。

(チ) 訴追にあたりては證據を必要とせず、訴追にあたりては現場になかりしもの、證言を採用することを得。

(リ) 官憲は法律を實行し、自由を行はしむる爲に如何なる手段(即ち拷問)をも用ふる事を得。

(ヌ) 煽動文書、圖畫を所有するものは逮捕投獄する事を得。(茲に煽動とは英國政府に對し反對し、または是に親和せざるものを言ふ)

(ル) 嘗て政治犯として受刑せるものは一定の區域外より出ることを得ず、定時警察に報告をなす義務を有し、官憲に豫告なくして住所を變更するを得ず、其の行動を慎しむことに對し保障を與ふるを要す。是等のものは集會に参加するを得ず、且つ公事、即ち政治的や社會的問題或は教育的宗教的問題を公に論議するを得ず。

(ヲ) 元政治犯人たりしものと交際するもの及び其の家族は逮捕投獄せらる。

(ワ) 嫌疑ある時は何處たるを問はず、令狀なくして搜索することを得。

五

英國政府を立憲的に批難したラホール・トリビューンの老主筆ナート・ロイの公判にあたり、英國判事は印度刑法第二百二十四條第一項を適用したが、同項は「英國王及び英國に挑戦する」事項を擧げたものであつて、其の内容は左の如くである。

- (イ) 政府を公に批難する事。
 - (ロ) 現行法に反對する事。
 - (ハ) 政府の措置が不當なりといふ事。
 - (ニ) 政府の軍隊に依り銃殺せられたるものに同情し、是を殉國者なりといふ事。
 - (ホ) 事件に關し政府のコムミュニケと異なる報告を發表する事。
- 新聞が如何に彈壓せられたかは、右の例に依るも一目瞭然である。

六

文明、文化の認められない處に於て人民の忍耐は遂に失はれざるを得ぬ。それは英國軍事政府

に依り創られ維持せられるアナキーの中に暮すことゝなるからである。

英帝國に依つて幾度となく繰り返された非人道行爲に對し、茲に國民は相携へて蹶起するに至つた。國民は印度から英國の禍害を排絶すべき責任の其の双肩にあることを自覺し始め、彼等の決意は全國的行動を開始せしむるに至つたのである。

彼等は茲にサチアグラハ運動を開始した。サチアグラハとは本來、眞理の把持、又は眞理力を意味する。またガンデイに依れば、それは愛、靈の力である。それは敵に苦痛を與へず、自ら苦痛を受けることに依つて眞理を恢復するせんとする事である。

宛かもダニエルがミード人、ペルシア人の法の無意義を示すに行つた不服従、またソクラテスがアテネの青年に眞理を説きつゝ毒を仰いだと同様、印度のサチアグラハ運動者は、非軍事抵抗に依り、英國の不當なる法律を撤回せしめんと決意するに至つた。即ち、國民は不當なる法律を敢へて犯し、それが爲刑罰を受けても、猶英國の法律實施權を認めようとせぬのである。

七

一九一九年三月二十四日、ガンデイは次の如き宣言を行つた。

「ローラット法の実施せらるゝ一九一九年四月六日を期し、國民は左の事項を行ふべし。

(イ) 二十四時間の絶食。

(ロ) 公共の爲必要なもの以外は全部仕事を休業し、市場及び店舗を閉づること。

(ハ) 全印度(村落を含む)に集會を開き、ローラット法反對の決議を通過する事。」

それは要するに英帝國主義の暴力を停止せしむる爲に行はれた一種の全國的總罷業であつた。而して武器を携帯し得ない結果、サチアグラハ運動者は當然に暴力の行使を避けたのであつた。即ち、印度人は英國政府に對し次の如く宣言したと同様である。

「吾人は吾人の承認なしに作製せる法律を認めない。故に如何なる目に遇はうとも、吾人は是に服従しない。」

總罷業の宣言後ラホール市民は饑餓を防ぐ爲、無料レストランを開く決議を行ひ、それは大衆の寄附で早速實行せられた。然るに英國官吏たるジョンソン大佐は無料レストランを悉く閉鎖すべき命令を發したのである。

國民的集會の催しは各所に計劃せられたが、先づ一九一九年三月三十日、パンジャブ州アマリツサアルに於て開催せられ、三萬乃至三萬五千の民衆が是に参加した。

同會席上キチリュ博士は、各人が國家の爲一身の利害を犠牲にすべきことを説き、「良心に従ひ行動すべし、勿論その結果は投獄せらるべしと雖も……如何なる人にも傷害を與ふべからず。

警官或は裏切者に對しても暴言を吐くべからず。」と演説した。

一九一九年四月三日、サチアバル博士、コト・マル、ヂナ・ナース、スワミ・アヌバナダ等アマリツサアルの主要人物に對し次の如き命が發せられた。

「今後更に命令ある迄アマリツサアル市より外に出づるを得ず。新聞紙に對し、直接または間接意見を發表するを得ず。集會に出席し、または是に書面其の他言傳をなすことを禁ず。」

然るに四月六日バブル・イスラム・カン氏主宰の下に集會が開催せられ、約五萬の市民が是に參加したのである。

八

四月九日は例年印度教徒にとつてラム・ナウミ祭の行はれる日であるが、當年は回印兩教徒が提携して是を行ふこととなつた。各地に大行進が行はれ、回印兩教徒相擁するの美しき光景が見られたのである。

然るに回印提携運動は英國官憲の忌諱に觸れる處となり、同運動の立役者であるサチアパル、キチリユ兩博士は追放せらるゝに至つた。次いでラホールのジョンソン大佐は、「印度教徒はバドシャイ回教寺院に入るを得ず。」との布令を出した。

四月十日兩博士追放の報がアムリツサルに傳はるや、市民は相集ひ其の赦免を歎願せんとした。其の集會は何等武器を帯びざる平和的市民の集りであつた。然るに英國軍隊は何等の豫告

なく群衆に發砲し、是等を殺傷した。群衆は憤慨しつゝ殺傷せられた同胞を運搬したが、殺傷せられた同胞を目の邊に見た市民は益々亢奮した。然し彼等は何等の武器を有せず、軍隊に對し棒切れで防ぐのが關の山であつたが、軍隊は發砲と同時に二十五名を即死せしめ、多數のものを負傷せしむるに至つたのである。

負傷者に對し、官憲は何等の措置も講じなかつた。負傷者が手當を乞ひたる處、英人副警視は「自分勝手に手當すればよい。」と放言した。またゼナナ病院の英人看護婦イスデン夫人は負傷せるものを見ながら嘲笑し、「回教徒も印度教徒も當然のばちを受けたのだ。」と公言した。

讀者は亢奮せる群衆の心理状態が如何なるものであつたかを容易に想像し得るであらう。銀行が忽ち襲撃せられ、公共建物に火が放たれたのも無理からぬことであつた。偶々英人教師シャウ、ド嬢が群衆の中を自轉車で通りかゝつた處、忽ち前記イスデン夫人と誤まられて襲撃を受けたが、臆て印度人自らその間違を知り其の場を逃れしめた。

警官は無辜なる人民の保護より銀行財産の保護にあたつてゐた。

以上の事は四月十日の午後起つたのであるが、夕刻にはすべて平和に歸し軍隊が街の治安にあつてゐた。

十一日、ダイア將軍がアムリツサルに到着し、先づ市民の大量檢舉を行つた。

また同日朝早く、市民は死者の葬式を行はうとしてゐたが、軍隊は是を見て嘲笑的態度を示した。臆て同市の水道、電氣の供給を絶たれ、加之外部から食糧を同市に持ち込むことも禁ぜられてしまつた。

四月十三日は印度教徒にとつて新年の祝日であり、午後四時半よりジャリアンワラ・バグに於て盛大な會合が開かれる豫定になつてゐた。ダイア將軍は同日十二時四十五分此の報を得、直ちに麾下の部隊に出動準備を命じた。定刻五千から二萬の群衆が會場に集つたが、その中には少年少女、或は幼兒を抱けるものも少くなかつた。そして、群衆は何等の武器を有して居らなかつた。

ジャリアンワラ、バグは家屋に圍繞せられた廣場であり、茲に来るには狭い通路があるだけである。即ち狭い四五ヶ所の通路以外に出入口はないが其の入口なる一ヶ所は高臺となり、場内の

群衆を眼下に見下ろすことの出来る位置にあり、茲から射撃せられては何處へも逃れる隙はなかつたのである。

ジャリアンワラ・バグに型の如く集會が行はれてゐる時、ダイア將軍は自ら九十名の兵士と二臺の装甲自動車を率ゐ、午後五時頃會場に到着したが、到着と同時に兵に散開を命じた。

九

以下に示す處はその後、ハンター調査委員會の取調べに於て、ダイア將軍が當時の模様につき供述せる處である。

問「バグに行つて君は何をしたか。」

答「射撃を命じた。」

問「早速にか？」

答「直ちに。」

余の義務を果すべきことを決意する迄に三十秒と要しなかつた。」

問「群衆は當時何をしてゐたか。」

答「集會を開いてゐた。小高い處に一人の男が立ち、盛に手を動かしてゐたが、其の有様は演説を行つてゐる様であつた。其の男の位置は丁度廣場の眞中にあり、我等の部隊から五六十碼離れてゐた。」

問「群衆を解散せしむる前に、群衆は何等の行動にも出でなかつたか。」

答「何もしなかつた。唯、若干のものが逃げ去らうとしてゐた。」

問「群衆は逃げ出さうとしたのだね。」

答「然り。射撃開始と同時に中央の大群衆が一齊に右手に逃れんとした。」

問「當時は未だ戒嚴令が布かれてゐなかつたのだ、君は左様な重要な措置を執る前に、市の治安の責任を有する治安官と協議するを至當と考へなかつたか。」

答「當時協議すべき治安官は居なかつた。余は其の他のものに諮る要なしと考へた。余は何を

なすべきかを即時決定しなければならなかつた。余は軍事的見地より直ちに射撃を要すと認め、若し是を行はざれば余の義務に忠實なる所以に非ずと思考した。」

問「射撃は解散せしむるのが目的であつたか。」

答「否、解散しようとしても猶射撃を續けた。」

問「射撃後直ちに群衆は解散し始めたか。」

答「直ちに。」

問「其の際猶射撃を續けたのだね。」

答「然り。」

問「群衆が解散し始めたのに、何故射撃を止めなかつたか。」

答「全部解散を見る迄射撃するのが余の義務と思考した。僅か射撃するだけなら、余の射撃は全く間違つてゐるといふ事にならう。」

種々の質問に對しダイヤ將軍の答へた處を綜合すれば、射撃は約十分間發射を繼續したといふ

事である。彼は実際には發砲の要なくして群衆を解散せしめ得たのであるが、それでは群衆が再びとつて返し、彼を嘲笑し、馬鹿にするであらうと考へ發射したといふのである。

射弾は全部で千六百五十發發射せられたが、彼は全彈藥が盡きて始めて「撃ち方止め」を命じたのである。

彼は負傷者に對し何等の措置も執らなかつたが、それは當時彼にとつてなすべき事と考へなかつたからであるといふ。また彼は屢々射撃中止を命じ、群衆の最も密なる部分に射弾を集中せしめたが、それは群衆の逃げ足がのろいからではなく、群衆がかたまらない様にするためにあつたと述べてゐる。

英國政府の發表に依れば、當時の即死五百名、負傷者千五百であつたといふが、アムリツサル有力者ララ・ギルダリ・ラルに依れば死者千名を越えたとの事である。正確なる數は兎に角不明ではあるが、ダイア將軍に對し、英國軍事會議は何等卑劣の行爲なしと斷じたのであつた。

何等の武器、防備なき無辜の男女、子供に對してなされた殘虐なる殺戮は、將に一九九二年

レンコの大虐殺以上に非人道的といふべきである。然るに虐殺の濟んだ後には、今度は恐怖政治が行はれるに至つたのである。

十

即ち、午後八時以後は何人も外出すべからず、右の時間後に屋外に在るものは射殺すべしとの布告が發せられた。斯くて親戚のものが負傷者を看護に行く事さへも不可能となつた。

偶々バグ附近の家から當時の狀景を目撃せるララ・ギルダリ・ラルは次の様に述べてゐる。

「余は數百人の即死する實情を目撃した。射弾は群衆の逃げ出さうとする出口に集中せられた。邊一面が血の海となつた。地上に匍ひつくばつてゐるもの迄が射撃の目標となつた。官憲は死傷者に對し何等の措置を執らうとしなかつた。死者は大人ばかりでなく、子供も混つてゐた。」

大虐殺の行はれた夜の模様につき、同日夫を殺されたラタン・デビ夫人は次の如く述べてゐる。「私はジリアンワラ・バグの家におりますと、發砲の音を聞きました。丁度寢ようとして居りました